長崎県文化財調査報告書　第193集

開　遺　跡　Ⅱ

主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

長崎県教育委員会

巻頭カラー①　掘立柱建物（SB1）検出状況（西から）

巻頭カラー②　竪穴住居跡（SH1）完掘状況（北から）

発刊にあたって

本書は，主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に伴って実施された，諫早市飯盛町開（ひらき）遺跡の発掘調査報告書です。

開遺跡は，昭和46年に発掘調査が行われ，12世紀～13世紀（平安時代末～鎌倉時代）にかけての遺跡であることが明らかとなっております。また，遺跡周辺には石塔群や山城などが点在し，鎌倉時代から室町時代の面影を色濃く残す地域です。

今回の調査では，150基を超える鎌倉時代から室町時代にかけての遺構群を検出し，建物跡や柵列などを確認することができました。さらに，諫早市飯盛町内では初めてとなる弥生時代の竪穴住居跡を確認することができ，約2000年前から先人がこの地で生活していたことを明らかにすることができました。

また，発掘調査の後半には，地域の皆様を対象とした現地説明会を開催しましたところ，約100名もの方々にご参加いただきました。今回の現地説明会を通して，身近にある文化財へ関心を持っていただき，愛護の精神をはぐくむきっかけになっていただければと思っております。

最後になりましたが，炎天下のなか発掘調査に従事された外業作業員の方々をはじめ，様々な形でご協力いただいた諫早市飯盛支所の皆様など，関係者の方々に御礼申し上げまして，刊行のあいさつといたします。

平成19年３月30日

長崎県教育委員会教育長

横田　修一郎

例　　言

1．本書は，主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に伴って実施した，開遺跡発掘調査報告書である。

2．調査は，長崎県教育委員会が主体となり，平成18年７月10日から同年８月23日にかけて実施した。

3．調査関係者は次の通りである。

範囲確認調査

調査担当　長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班　文化財保護主事　山下英明

文化財調査員　平田賢明

本発掘調査

調査担当　長崎県教育庁学芸文化課埋蔵文化財班　文化財保護主事　中尾篤志

文化財調査員　平田賢明

4．調査区周辺の地形測量・土層図作成および遺構実測図は，すべて調査担当者が作成した。また，発掘現場での写真もすべて調査担当者が撮影した。

5．遺物の実測は，土器・陶磁器を一瀬裕子・今利陽子・小川博美・末吉紗矢香・中村千春・野島愛子・浜崎美加・林田志保美・福山留美・横田愛子が行った。石器・石製品・鉄製品・木製品の実測は，中尾・竹田ゆかりが行った。トレースは，中尾・浜崎・横田・和田美加が行った。また，製図作業において成田万里の協力を得た。遺物写真撮影は中尾が行った。

6．竪穴住居炉跡出土の種実同定，およびピット内出土の木材の樹種同定・年代測定を，パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。その成果は第Ⅴ章に掲載した。

7．本書に掲載した遺物・写真・図面類は，すべて長崎県教育庁学芸文化課資料整理室に保管している。

8．発掘調査においては，以下の方々にご協力頂いた。

竈迫敏光（諫早土木事務所），川浪豊昭・小川供孝（諫早市教育委員会飯盛分室），

秀島貞康・川瀬雄一（諫早市教育委員会），三ヶ島秀雄，佐藤平太夫

9．本書の編集は，中尾が行った。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯…… 1
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境…… 2
第Ⅲ章　調査の概要…… 5
　1．範囲確認調査の概要…… 5
　2．本発掘調査の概要…… 8
第Ⅳ章　まとめ…… 35
第Ⅴ章　自然科学分析…… 37

挿　図　目　次

第1図　開遺跡位置図…… 1
第2図　周辺地形および遺跡分布図…… 2
第3図　周辺の遺跡…… 3
第4図　範囲確認調査区と本調査区の位置…… 6
第5図　遺構検出状況…… 7
第6図　遺構配置図（全体）…… 9
第7図　遺構配置図（時期別）…… 10
第8図　調査区土層図…… 11
第9図　SH1周辺中世包含層および中世ピット群検出状況…… 13
第10図　SH1実測図…… 14
第11図　SH1出土遺物…… 15
第12図　SB7・SB8実測図…… 16
第13図　SB8および弥生時代ピット出土遺物…… 17
第14図　SB1実測図…… 21
第15図　SB1ピット実測図および出土遺物…… 22
第16図　SB2・SB3実測図およびSB2出土遺物…… 23
第17図　SB4実測図および出土遺物…… 24
第18図　SB5・SB6実測図およびピット実測図，出土遺物…… 25
第19図　柵列実測図およびピット実測図…… 26
第20図　柵列出土遺物…… 27
第21図　その他のピット出土遺物…… 28
第22図　土坑実測図および出土遺物…… 29
第23図　遺構検出前の遺物出土状況…… 30

第24図　包含層出土遺物…… 31
第25図　遺構群の変遷…… 36
第26図　ピット45出土木材実測図…… 37

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧…… 4
第２表　ピット観察表①…… 19
第３表　ピット観察表②…… 20
第４表　遺物観察表①…… 33
第５表　遺物観察表②…… 34
第６表　放射性炭素年代測定結果…… 38
第７表　暦年較正結果…… 38

図　版　目　次

PL1　木材組織写真 …… 39
図版１　北半部完掘状況／南半部完掘状況／Pit65・66検出状況 …… 41
図版２　Pit39遺物出土状況／Pit45木柱出土状況／Pit77遺物出土状況 …… 42
図版３　SH1遺物出土状況／SH1完掘状況／SH1炉跡完掘状況…43
図版４　SH1出土遺物①② …… 44
図版５　SB1出土遺物①② …… 45
図版６　柵列出土遺物／石製品・鉄製品…… 46
図版７　SB8出土台石／TP3Pit4（Pit110）出土石鍋 …… 47

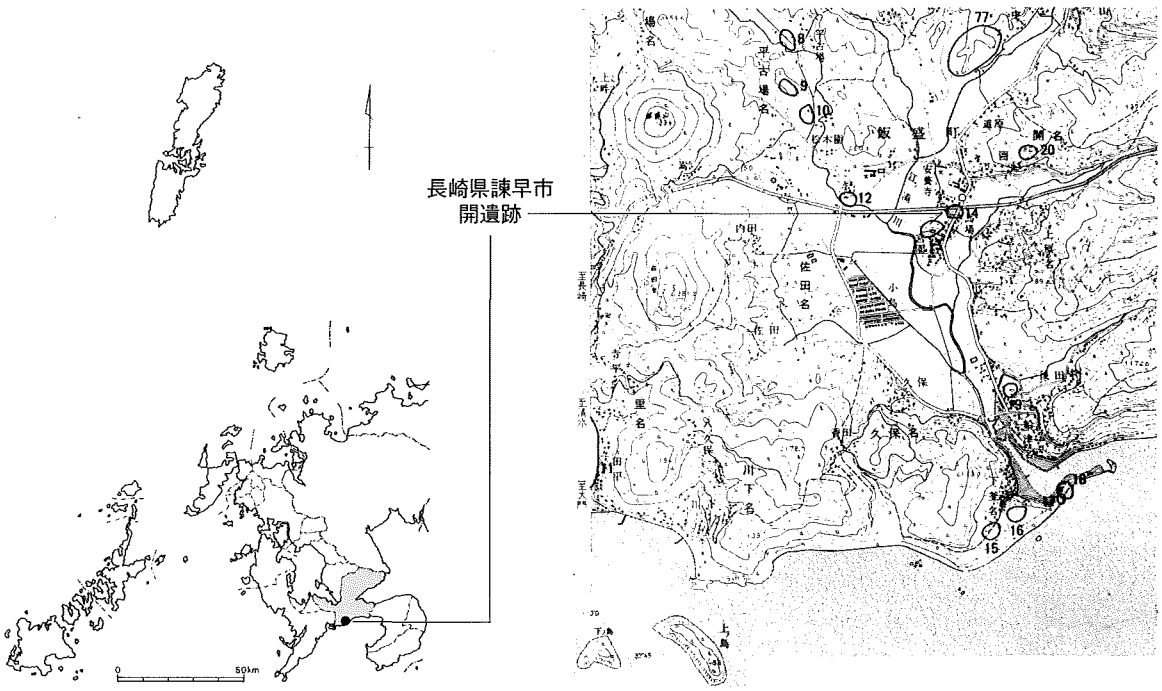
第Ⅰ章　調査に至る経緯

諫早市飯盛町開地区周辺は，長崎から島原に抜ける国道251号線と，諫早市街地へ抜ける主要地方道諫早飯盛線が合流する交通の要衝である。また，付近には諫早市飯盛支所（旧飯盛町役場）などの公官庁が集中し，市町村合併前は行政の中心であった。そのため，交通量の増加に対応するための道路改良工事をはじめとして，周辺地域の開発が頻繁に行われている。昭和46年には，国道251号線の拡幅に伴って開遺跡の発掘調査が行われ，ピット群に伴って青磁・白磁・滑石製石鍋などが出土し，中世の遺跡であることが周知された（正林編1982）（**第４図**）。

平成16年，主要地方道諫早飯盛線の道路改良工事を実施する計画が持ち上がり，開遺跡も工事予定地内に入ることから，事業主体である諫早土木事務所道路課と協議を行った。その結果，平成16年から平成17年にかけて範囲確認調査を実施することとなり，のべ8ヶ所に2m四方の調査区を設定して調査を実施した（和田編2006，和田編2007）（**第４図**）。その結果，国道251号線と合流する交差点の北側3ヶ所で中世を中心とする遺物が出土し，230㎡について本発掘調査が必要であることが明らかとなった。この成果を受けて，再度諫早土木事務所と協議を行い，平成18年7月10日～8月23日にかけて本調査を実施した。調査面積は230㎡を予定したが，近隣の個人住宅の出入口やライフラインの確保のために調査を実施できない箇所があり，最終的な調査面積は180㎡となった。

【参考文献】

正林　護編1982　「開遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ』長崎県文化財調査報告書第57集　長崎県教育委員会
和田政則編2006　『長崎県埋蔵文化財調査年報13』長崎県文化財調査報告書第187集　長崎県教育委員会
和田政則編2007　『長崎県埋蔵文化財調査年報14』長崎県文化財調査報告書第191集　長崎県教育委員会



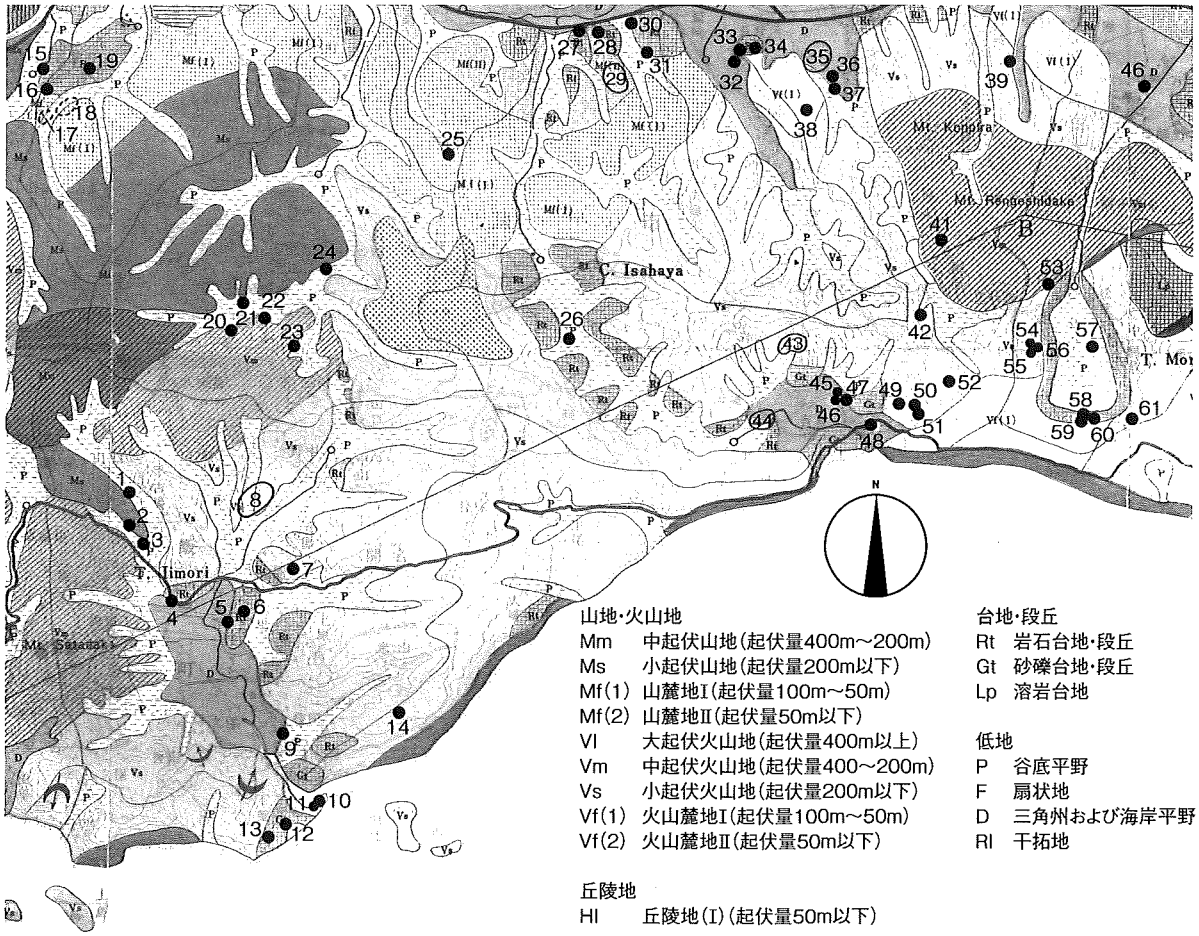
第１図　開遺跡位置図（S=1/15000000,1/25000）

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1．地理的環境

諫早市飯盛町は，長崎半島と島原半島を東西につなぐ諫早地峡の南部に位置し，単調な海岸線をなす橘湾に面している。橘湾を囲む陸地は，東の雲仙火山西麓部では高度差が非常に大きいのに対して，西部は安山岩や凝灰角礫岩などからなる台地性地形や丘陵が発達し，相対的に起伏が少ない。西部地域では，これらの台地や丘陵を解析する河川によって，河口部を中心に小規模な谷底平野が形成される点に特徴がある（**第2図**）。

開遺跡周辺では，八天岳・飯盛山・佐田岳からなる飯盛溶岩円頂丘群がトロイデ型の独立した火山体を形成し，これらの山体を解析して江ノ浦川が流れ，谷底平野を形成している。江ノ浦川の両岸には標高5～10mの河岸段丘が発達するが，遺跡の分布も山城をのぞけば河岸段丘上や丘陵裾部に集中する（**第3図**）。開遺跡周囲の谷底平野は，現在陸化しているが，この平野は近世以降の干拓によるもので，中世までは「月の港」と呼ばれる海域であったことが知られている（**第3図**）。12～13世紀頃の汀線付近に立地したと考えられる普同寺下遺跡では，土師質土器や滑石製石鍋に伴って貝層が検出されている（**第3図4**）。この貝層を構成する貝類は，マガキ・サルボウ・ハイガイ・ウミニナなどの干潟群集が主体であり，当時の周辺の海況は，閉塞性が高く水深の浅い汽水域を形成していたものと推測される。



第2図　周辺地形および遺跡分布図（S=1/75000）

第３図　周辺の遺跡（S=1/20000）

※薄いアミカケは中世以前の海域
濃いアミカケは開遺跡

2．歴史的環境

諫早地峡南半部地域では，旧石器時代以降に人間の活動痕跡が確認できる。飯盛町築崎遺跡（9）では，台形石器や小型のナイフ形石器が採集されているが，まとまった出土は見ていない。本格的に遺跡の展開が認められるのは縄文時代以降である。有喜低地に面した諫早市有喜貝塚（48）では，縄文時代中期末～後期にかけての貝塚が確認され，多量の縄文土器および石器類が出土している。また，岩礁性貝類を中心とする貝類のほか，動物骨・魚骨などの自然遺物が豊富で，これらに伴って単式釣針やヤス・銛などの骨角器類も出土している。弥生時代には，森山町西ノ角遺跡（53）で弥生時代中期後半から終末にかけての集落跡が見つかっている。古墳時代になると，台地の縁辺に直径5m前後の小規模な円墳が築かれる（54～56・58～60など）。6世紀代の群集墳と考えられるが，本格的な調査は行われていない。中世になると，台地上に山城が相次いで造られる。また，江ノ浦川上流域では，土師野尾古窯跡を中心とした16世紀代の窯跡が点在しており（22～23），比較的早い段階で陶器類の生産を行っていたことが確認されている。

開遺跡周辺に目を転じると（**第3図**），縄文時代後～晩期の石銛が出土した築崎遺跡（9）のほか，弥生時代後期の墓域と考えられる下釜石棺群（11）など，縄文時代～弥生時代の遺跡が散見されるが，特に中世の遺跡が集中している。丘陵部には，「月の港」を取り囲むように平古場城（2），岡城（8），囲城（7）といった山城が点在し，「月の港」に半島状につきだした河岸段丘上に開遺跡（6），段丘裾部の旧汀線付近に普同寺下遺跡（4）がある。普同寺下遺跡や開遺跡の過去の調査成果から，これらの遺跡は12世紀～13世紀の遺跡であることが知られるが，この他にも周辺には13世紀～14世紀の石塔群（**第4図**）や，16世紀に開かれた江ノ浦神社などがあり，山塊に囲まれたコンパクトな空間の中に，中世の城館と生活の場が良好に残存する稀有な地域といえよう。近世には，元禄年間に江ノ浦川河口に井樋提塘（いびていとう）が造られ（**第3図**），「月の港」の干拓が進んで現在の姿となっている。

第1表　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	山ノ口遺跡	縄文	21	下後古場遺跡	縄文	41	宗方城跡	中世
2	平古場城跡	中世	22	土師野尾古窯跡	近世	42	木秀古墳	古墳
3	平古場遺跡	旧石器・縄文	23	土師野尾窯跡	近世	43	鶴田城跡	中世
4	普同寺下遺跡	中世	24	土師野尾遺跡	縄文	44	宇木城跡	中世
5	西馬場遺跡	旧石器・縄文	25	駄森積石塚	不明	45	六本松遺跡	弥生
6	**開遺跡**	**弥生・中世**	26	堤の端遺跡	縄文	46	上原貝塚	弥生
7	囲城跡	中世	27	A地点遺跡	弥生	47	上原遺跡	弥生
8	岡城跡	中世	28	B地点遺跡	弥生	48	有喜貝塚	縄文
9	築崎遺跡	旧石器・縄文	29	小栗C地点遺跡	弥生	49	平の上遺跡	縄文
10	下ノ釜貝塚	縄文・弥生	30	十仙平遺跡	縄文	50	熊野神社遺跡	中世・近世
11	下ノ釜石棺群	弥生	31	源内谷遺跡	縄文	51	有喜大久保遺跡	縄文
12	上原遺跡	縄文	32	崎田遺跡	弥生	52	小鳥帽子岳古墳	古墳
13	下屯山遺跡	縄文・古墳	33	尾野大久保遺跡	縄文	53	西ノ角遺跡	弥生・古墳
14	飯盛鬼塚古墳	古墳	34	下組遺跡	縄文	54	柏原2号墳	古墳
15	笹原遺跡	縄文	35	宗方筒井遺跡	旧石器～中世	55	柏原3号墳	古墳
16	長牟田遺跡	縄文・中世	36	水の手遺跡	古墳	56	柏原1号墳	古墳
17	平遺跡	不明	37	太郎丸遺跡	弥生	57	木正手遺跡	古墳
18	鷹野遺跡	旧石器・縄文	38	井手遺跡	中世	58	椿川古墳群2号墳	古墳
19	西輪久道遺跡	旧石器・縄文	39	仁田野A遺跡	縄文	59	椿川古墳群1号墳	古墳
20	船蔵石積石塚	不明	40	上丁軒遺跡	不明	60	椿川古墳群3号墳	古墳
						61	長坂古墳	古墳

第Ⅲ章　調査の概要

1．範囲確認調査の概要

開遺跡の範囲確認調査については，すでに和田編2006・2007で概要が報告されている。内容は重なる部分も多いが，ここでは出土遺物を中心に報告する。

範囲確認調査は，平成16年度と平成17年度に分けて実施した。平成16年度は，東西に走る国道251号線から北側の3箇所，平成17年度は，国道251号線から南側の5箇所について実施し，調査区名は北から順にTP1～TP8とした（**第4図**）。いずれも2m×2mを基本としたが，遺物は国道251号線北側の3箇所（TP1～TP3）から出土した。

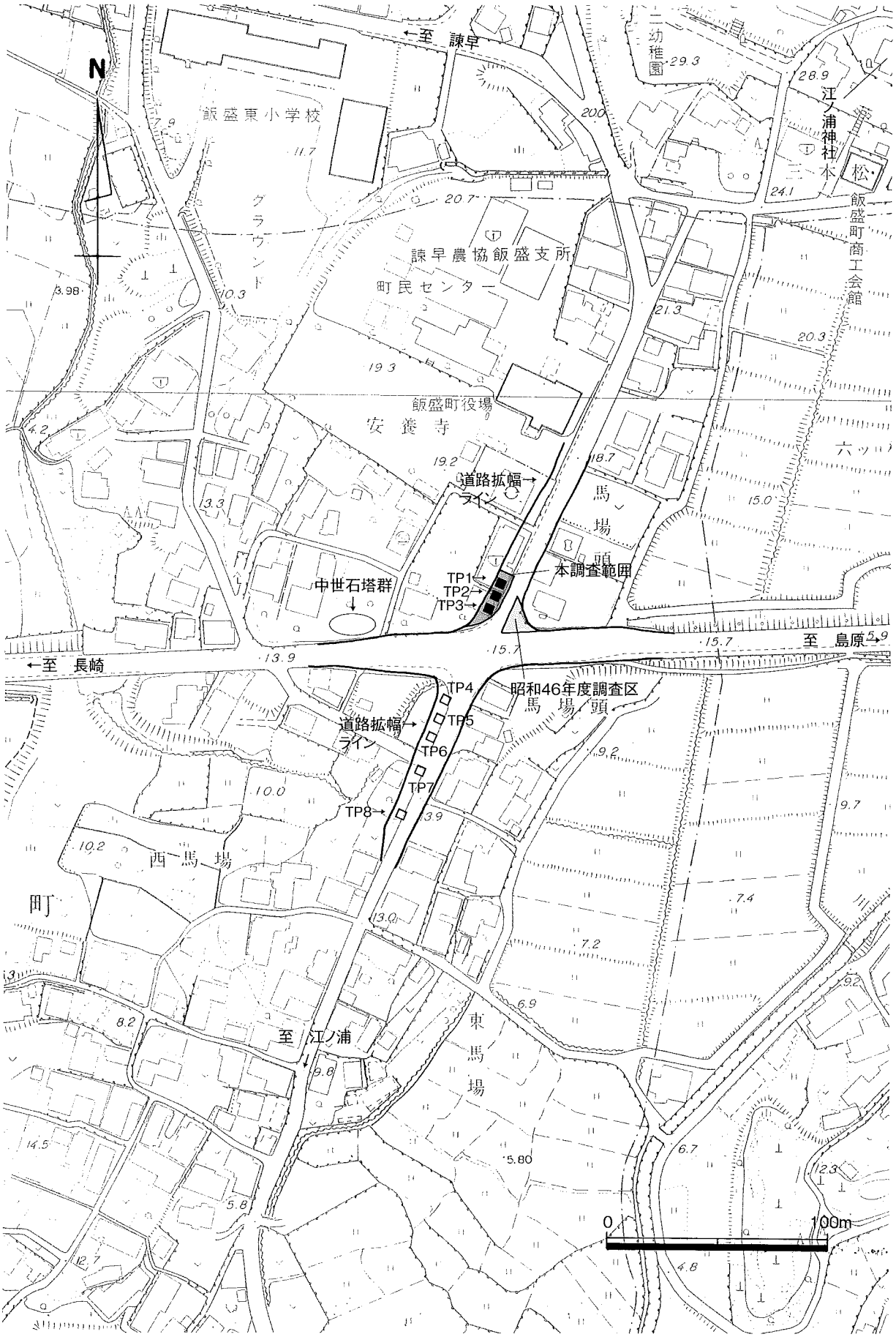
(1) 検出遺構と基本土層（**第5図**）

TP1～TP3からは，遺物に伴って遺構も検出している。TP3では，ピット4基・土坑1基・溝状遺構1基を検出したが，本調査でもこれらの遺構を確認しており，範囲確認調査時のピット1～ピット4は，本調査時のピット147・ピット148・ピット111・ピット110に，範囲確認調査時のSK1は本調査時のピット120に，SD1は本調査時のSD1にそれぞれ対応する。これらの遺構群に伴って，後述するように多数の遺物が出土している。

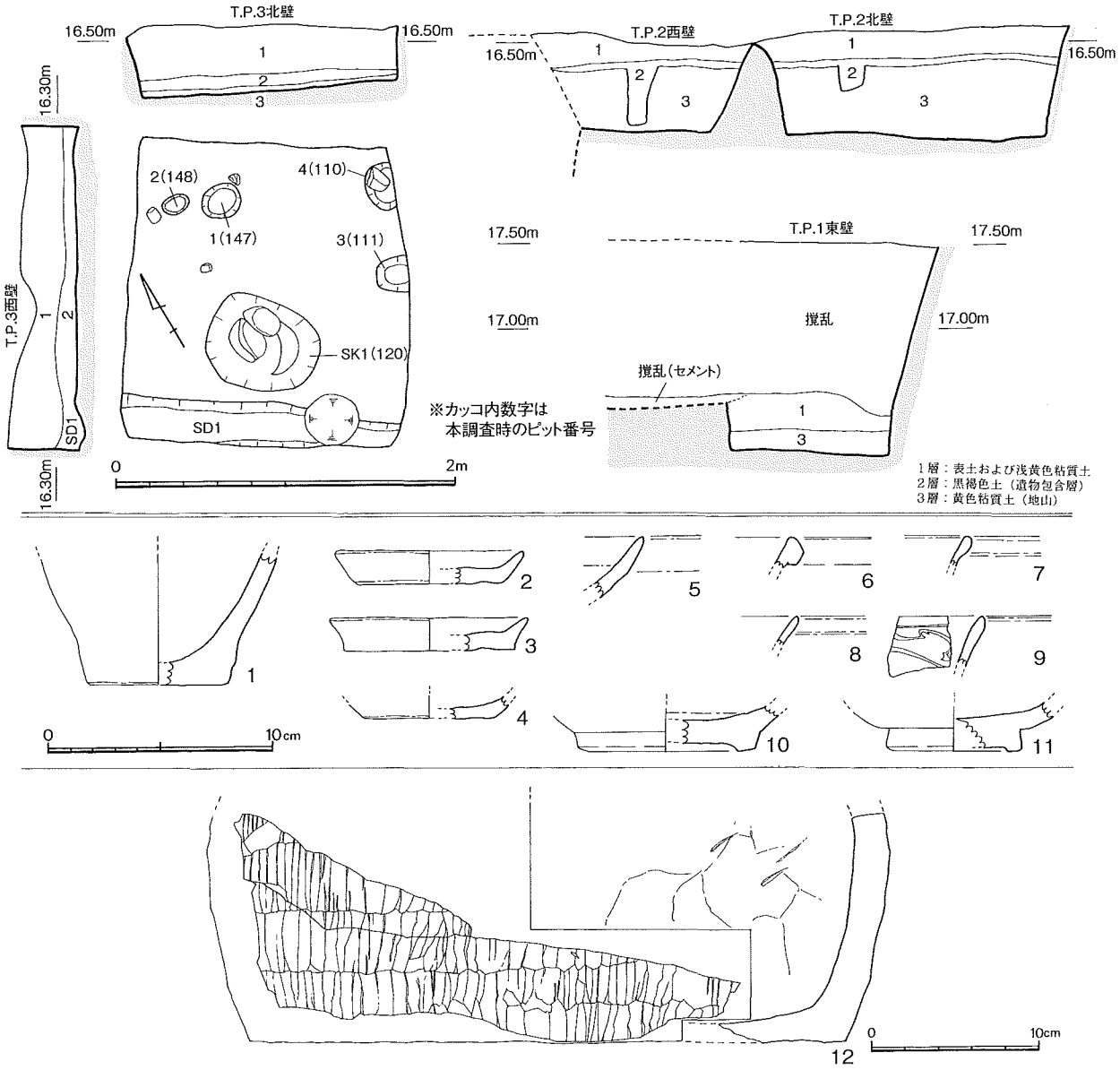
土層は，TP1～TP3ともほぼ共通しており，近現代の建物基礎を含む攪乱土をのぞくと，大きく3層に区分できる。1層は浅黄色粘質土で，本調査時の2層（2a層・2b層）に対応する。近代の水田耕作面および床土と考えられる層である。2層は黒褐色土で，本調査時の3層に対応する。マンガンが固結し非常に堅く締まった層で，弥生時代および中世の遺物包含層である。近代の水田構築時に遺構が破壊されて形成された層であろう。3層は黄色粘質土で，本調査時の4層に対応する。風化した玄武岩の小礫が混入する地山面である。この層を掘り込んで遺構が構築されている。

(2) 出土遺物（**第5図**）

1はTP3のピット2から出土した弥生土器である。甕形土器の底部付近で，表面は風化により調整痕などは残っていない。**2～4**は土師質土器の皿である。**2**はTP1のピット1からの出土で，底部から口縁部に向けて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切りでややいびつに仕上げている。**3**はTP3のSK1からの出土である。底部の接地面がやや外側に張り出し，口縁部にかけて外反しながら立ち上がる。底部の切り離し痕は風化により不明。内面には回転ナデ調整時の粘土の盛り上がりが確認できる。**4**は底部付近のみの資料。風化により調整痕を確認することはできない。TP1の1層出土。**5**は土師質土器の坏口縁部である。TP3ピット3からの出土で，胴部から口縁部にかけてやや内側に屈曲しながら立ち上がる。断面の観察では，屈曲部が粘土の接合面と考えられる。**6・7・10**は白磁である。**6**は口縁部が外側に大きくふくらんで玉縁状をなすもので，椀の口縁部であろう。全体に灰白色の釉が薄くかかる。TP3のⅡ層出土。**7**は口縁端部が外側に肥厚する薄手の白磁で，胴部から外反しながら立ち上がる。TP3のⅡ層出土。**10**は椀の底部で，底部に厚みがあり高台の接地面は外側に斜めに削られている。内面には灰白色の釉がかかるが，外面から高台にかけては露胎である。P3のピット1出土。**8・9・11**は龍泉窯系の青磁である。**8**は口縁部が外側に肥厚する薄手の資料で，灰オリーブ色の釉がかかる。形態的には**7**と類似しており，発色の悪い白磁の可能性もある。TP2のピット1出土。**9**は椀



第４図　範囲確認調査区と本調査区の位置（S=1/2500）



第５図　遺構検出状況（S=1/40）および出土遺物（S=1/3・1/4）

口縁部で内面に草花文を片彫りしている。TP3の2層出土。**11**は椀底部で底部の器壁が分厚く，高台の接地面も幅狭である。高台畳付および内面は露胎である。TP2の2層出土。**12**は滑石製石鍋でTP3のピット4から出土した。2破片に分かれ接合しないが，同一個体であることから合成して図化した。灰白色の緻密な滑石を素材とし，外面には縦方向に幅狭の調整痕が５段に渡って整然と並ぶ。内面は平滑に仕上げ，部分的に斜め方向の調整痕をわずかに残すのみである。底部は一度破損しており，素材面が露出している部分と平滑に再調整した部分があるが，いずれの面にも被熱に伴うススが付着しており，調理具として再利用されたことが分かる。

【文献】

和田政則編2006　『長崎県埋蔵文化財調査年報13』長崎県文化財調査報告書第187集　長崎県教育委員会
和田政則編2007　『長崎県埋蔵文化財調査年報14』長崎県文化財調査報告書第191集　長崎県教育委員会

2．本発掘調査の概要

本発掘調査は，範囲確認調査の成果に基づいて，TP1～TP3を含む道路拡張予定地に230㎡の調査区を設置した。国土座標に基づいて調査区全体に5mメッシュを組み，北から順にA区～O区までグリットを設定して調査を開始した。しかし，近隣個人住宅のライフラインや車両出入り口の確保のためにやむを得ず調査不可能な箇所があり，最終的な調査面積は180㎡で，調査グリットもA区～L区までが調査対象となった（**第6図**）。調査は排土置き場を確保する目的で，北半部と南半部に分けて実施した。

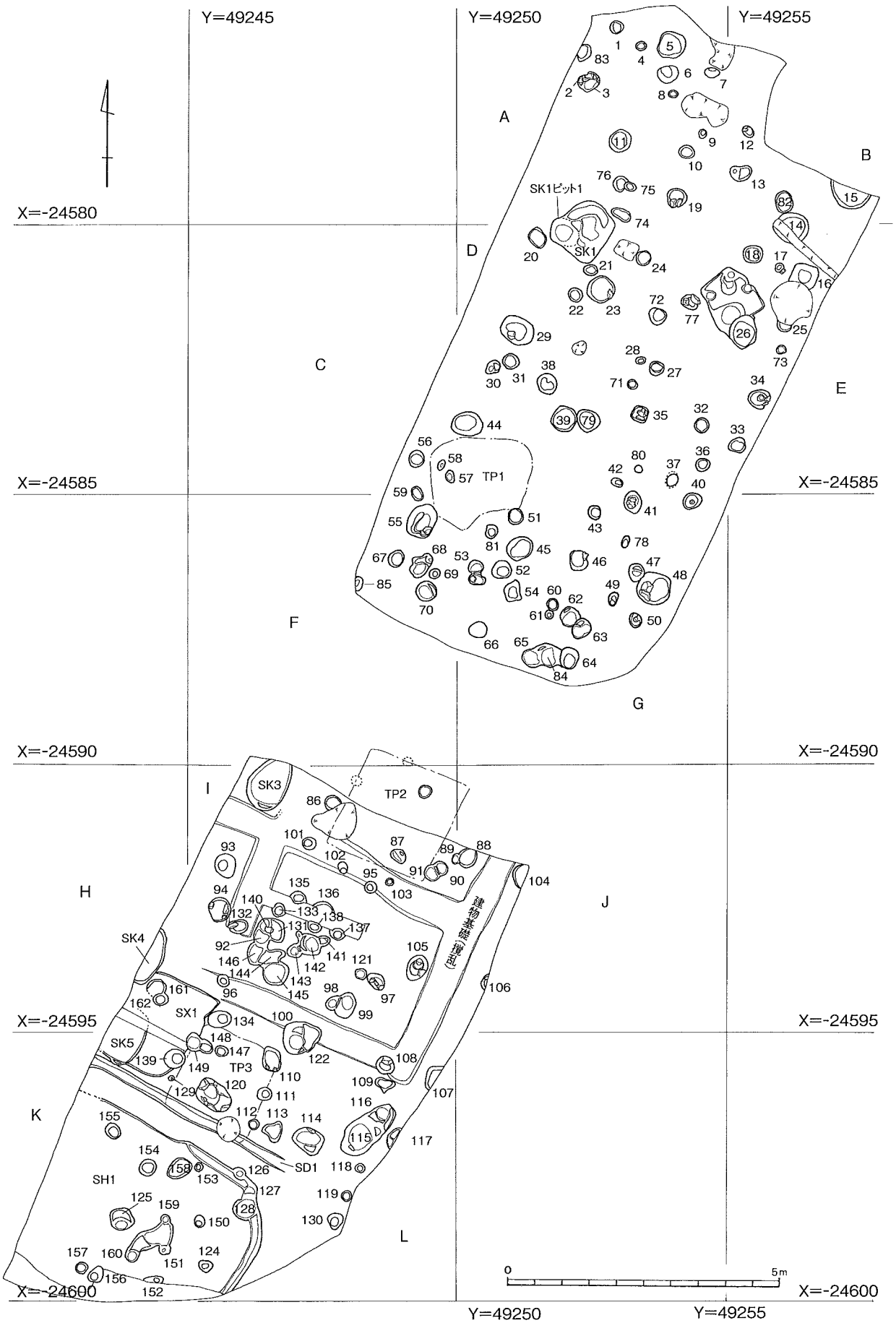
掘り下げは北半部から実施した。範囲確認調査時の1層～2層をバックホーで除去し，2層下半部の水田床土から人力による掘削を行った。水田層からは近世以降の陶磁器類が出土し，新しい時期の水田層であることが確認できたため，スコップや唐鍬で粗く掘り下げ，遺物包含層である3層を検出した。3層は近世の遺物をほとんど含まず，弥生時代および中世の遺物が細片となった状態で出土した。3層遺物包含層の下半部にはマンガンが沈着し，固結して硬化面を形成していたため掘り下げも難航した。遺物包含層を除去すると，4層地山面を掘り込んだ状態でピット群を中心とする遺構群を検出した。ピット群は深さ30cm以上のものが多く，残存状況は良好であった。また，遺構内からは遺物も多数出土し，所属時期も明確なものが多かった。このため，直径50cm程度の大型のピットについては，半裁して土層を確認しながら調査を行った。

北半部の調査終了後，北半部の埋め戻しと南半部の表土剥ぎをバックホーにて行った。北半部と同様，3層遺物包含層を人力で掘り下げたところでピット群を中心とする遺構群を検出したが，近年まで建っていた個人住宅の基礎によって破壊され，北半部ほど残存状況はよくなかった。しかし，調査区南端部において弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡を確認し，中世だけでなく弥生時代の遺構も存在することが明確となった。ピット群は，北半部と同様に50cmを越える大型のピットについては半裁して記録を取った。また，弥生時代の竪穴住居についても，土層の堆積状況を確認しながら慎重に掘り下げた。竪穴住居床面からは，上屋を支えたピット群とともに炭化物の詰まった浅い土坑を確認した。焼土は伴っていないものの，炉跡もしくはこれに関連する遺構と捉え，覆土をすべて土壌サンプルとして回収し，フローテーションを行って種実同定を依頼した。最終的に，弥生時代および中世のピット群162基（弥生時代29基・中世133基）を検出し，掘立柱建物8棟（弥生時代2棟・中世6棟），竪穴住居1棟（弥生時代）を確認して調査を終了した（**第6図・第7図**）。なお，平成18年8月20日に発掘調査現地説明会を実施し，地元住民の方々を中心に約100名の参加者があった。

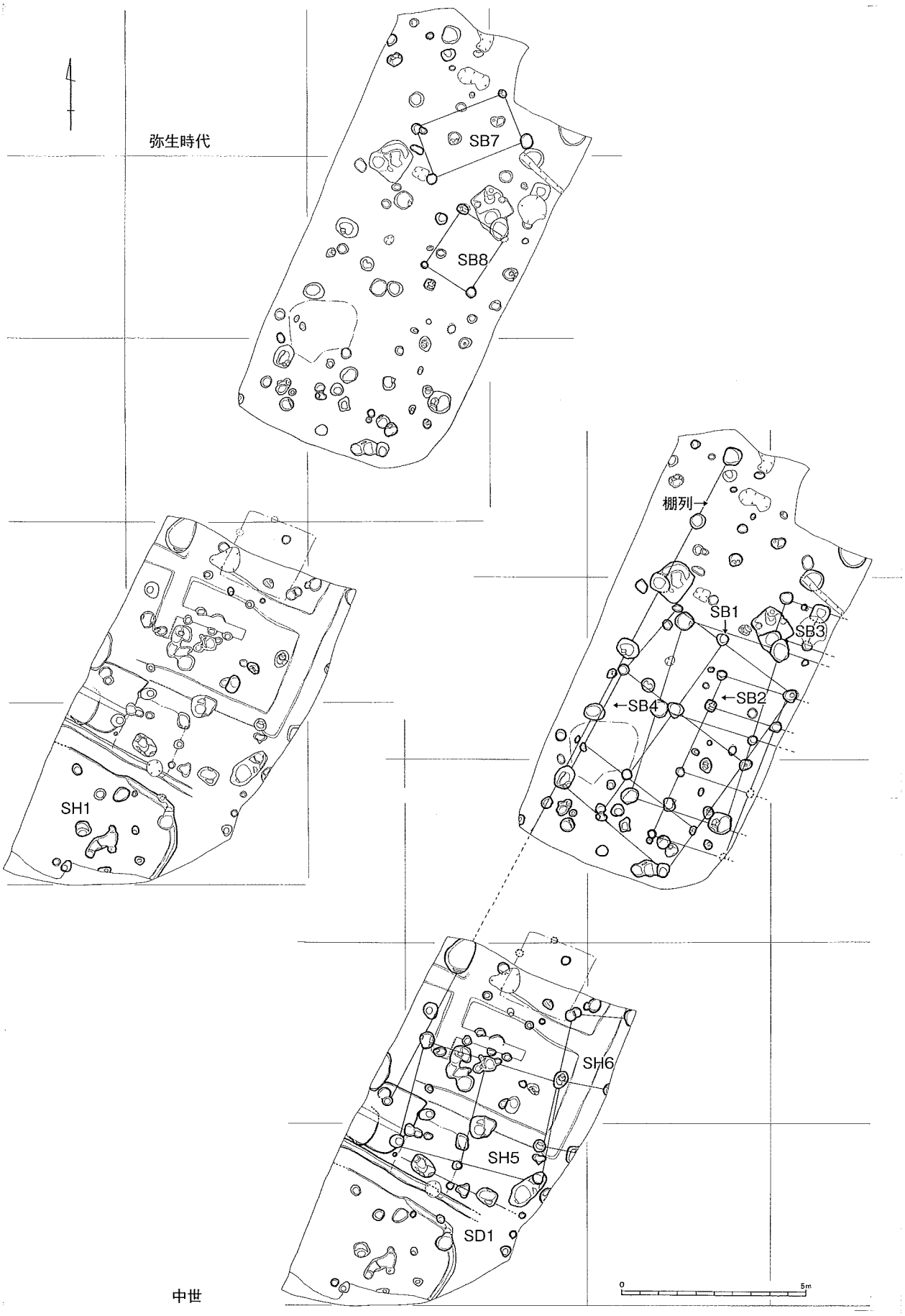
（1）基本土層（**第8図**）

ここでは北半部西壁の土層を基準に説明を加える。

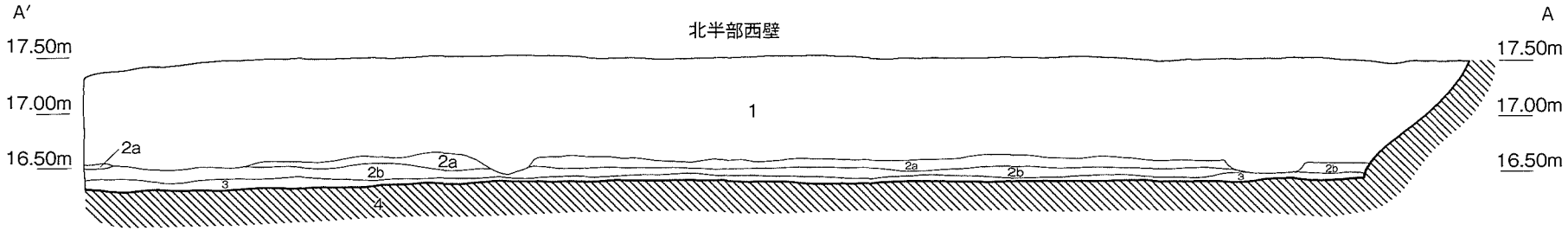
1層は近年の造成に伴うバラスやコンクリート材を含む攪乱層である。2層は北半部ではaとbに細分できa層がやや黄色みが強い。2a・2b層は水田耕作面および床土と考えられるが，それぞれ南半部の2層・3層にほぼ対応する。3層は遺物包含層で，南半部の4層に対応する。南半部では包含層以下にも5～6層が確認できるが，これらはいずれも遺構覆土である。4層は地山粘質土で，南半部の7層に対応する。いずれの遺構もこの層を掘り込んで構築されている。



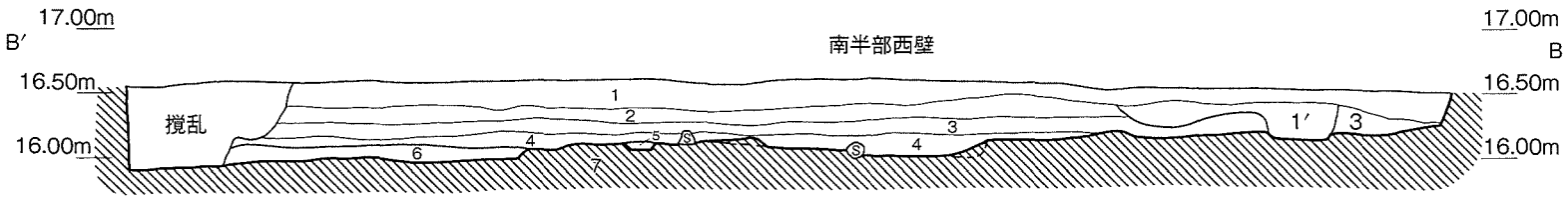
第６図　遺構配置図（全体）（S=1/100）※番号はピット番号，アルファベットはグリット名



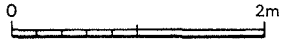
第７図　遺構配置図（時期別）（S=1/150）

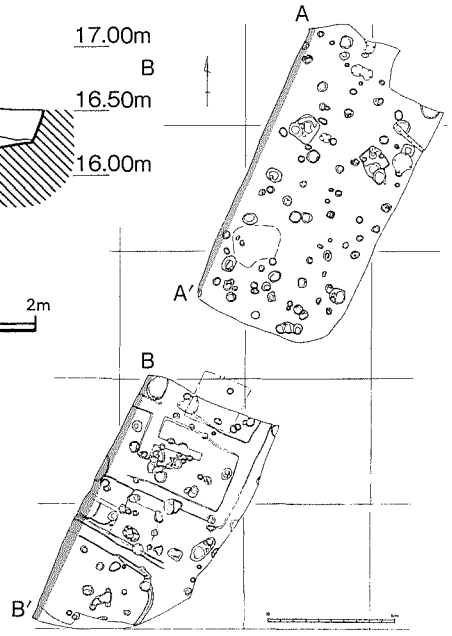


1層 ……灰白色(10YR7/1)コンクリート壁とバラス基礎
2a層 ……にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
2b層 ……褐色(10YR4/6)粘質土、橙色粒子散在
3層 ……黒褐色(10YR3/2)マンガン固結層.非常に固くしまる.
4層 ……明黄色(10YR7/6)粘質土.黒色岩(玄武岩?)の小礫が散在(地山)



1. バラス
1'.現代撹乱.建物基礎内埋土.レンガが含まれる
2. 暗灰色粘質土(旧水田)しまり弱い.
3. 暗灰色粘質土(旧水田床土)鉄分が沈着し赤みをおびる
4. 黒褐色土　遺物包含層(マンガン固結層)
5. 黒色土　SD1埋立.土師器片出土.しまり弱い.炭化物が混じる
6. SH1覆土
7. 地山(黄褐色土)上面にマンガン付着





第8図　調査区土層図 (S=1/60)

（2）遺構と遺物

①弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡1棟（SH1）およびピット群である。SH1は発掘現場で確認した遺構であるが，ピット群は調査終了後に遺物の整理が進む中で，弥生時代の遺物のみが出土したピットを抽出したものである。これらのピット群から掘立柱建物2棟（SB7・SB8）を図上で復元することができた。以下，個別に概要を報告する。

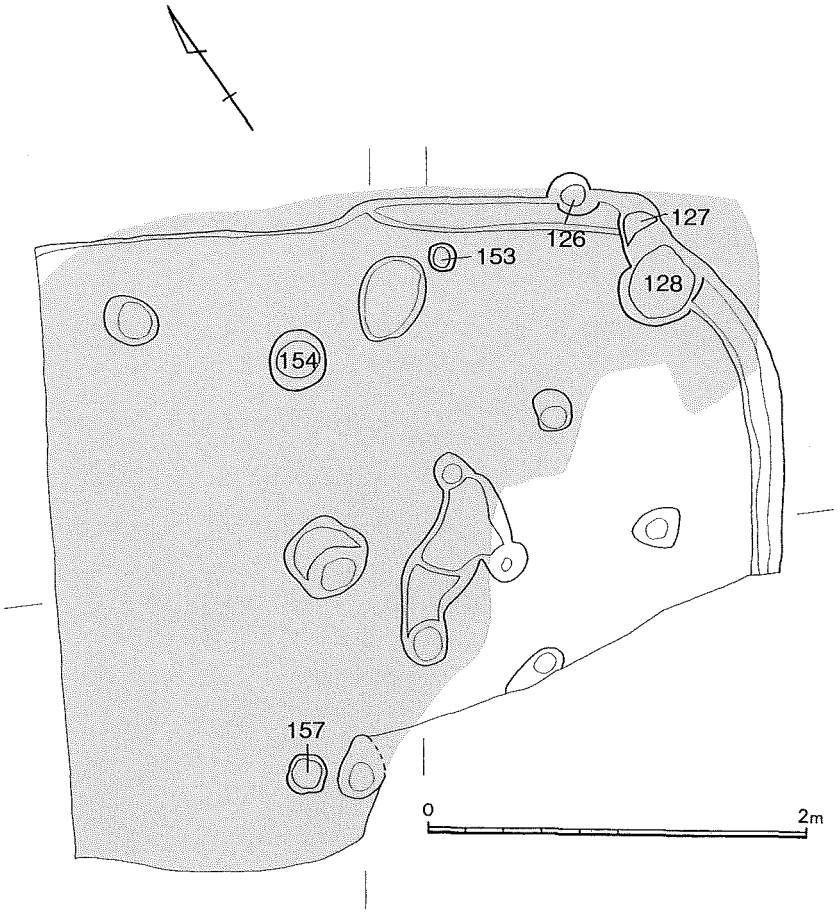
●竪穴住居跡（SH1）（**第9図・第10図**）

調査区の南端部で検出した遺構である。西半部は調査区外にのび，南半部は削平されているものの，北東隅が確認できることから，平面形は隅丸長方形をなすと推測される。現状で長軸長3.8m，短軸長3.4mである。竪穴住居跡の調査は，南北主軸に沿ってサブトレンチを設定して掘り下げ，土層の堆積状況を確認した後，土層観察用のあぜを残しながら全面を掘り下げていった。土層は堆積状況から大きく3層に分けることができる（**第10図**）。

SH1発見の契機となったのは，3層に類似した黒褐色粘質土で構成される中世包含層が平面方形に広がりを見せたことによる（**第9図**）。この包含層は，弥生土器の小片もわずかに交えるものの，中世の土師質土器や白磁を中心とした遺物が出土しており，SH1検出面のほぼ全面に渡って堆積していた。SH1の中には，中世に掘削されたピット群も存在するが，これらはいずれも中世包含層が堆積した後に掘削される。中世の段階で何らかの遺構であった可能性もあるが，弥生時代の竪穴住居が埋まりきらず，湿地状の窪地として残っており，中世の土地利用の段階で埋め込んだ可能性も考えられようか。性格は不明であるが，SH1検出時の中世包含層はSH1①層としてあつかった。**第11図1～4**はSH1①層出土遺物である。**1**は玉縁口縁を持つ白磁である。全体に灰白色の釉がかかる。**2～3**は土師質土器の皿である。**2**は器高が低く口縁部はやや内湾気味である。底部はヘラ切りの後なでたものか。**3**は底部から口縁部にかけて直線的に開く形態で，底部は回転糸切りの後なでて処理し，底面は凹凸があり不安定である。**4**は体部が直立気味に立ち上がり，底部は回転糸切りの後なでている。これらの遺物は12世紀後半頃の時期が想定される。

SH1①層を除去すると，②層褐色粘質土から大量の弥生土器が出土した。特に，SH1北西隅では，丹塗の高杯や甕形土器・壷形土器などが押しつぶされた状態でまとまって出土した（**第10図**）。見通し断面で確認すると住居跡床面からやや浮いた状態で出土しており，竪穴住居跡が廃絶して埋没する過程で，何らかの祭祀行為を行って土器を廃棄したものと推測される。③層は地山に類似した黄褐色粘質土で，やや赤みを帯びた色調が特徴である。非常に薄い堆積で，土層観察時には確認できたものの，平面での確認はできなかった。住居跡床面の貼床粘土の一部と考えられる。

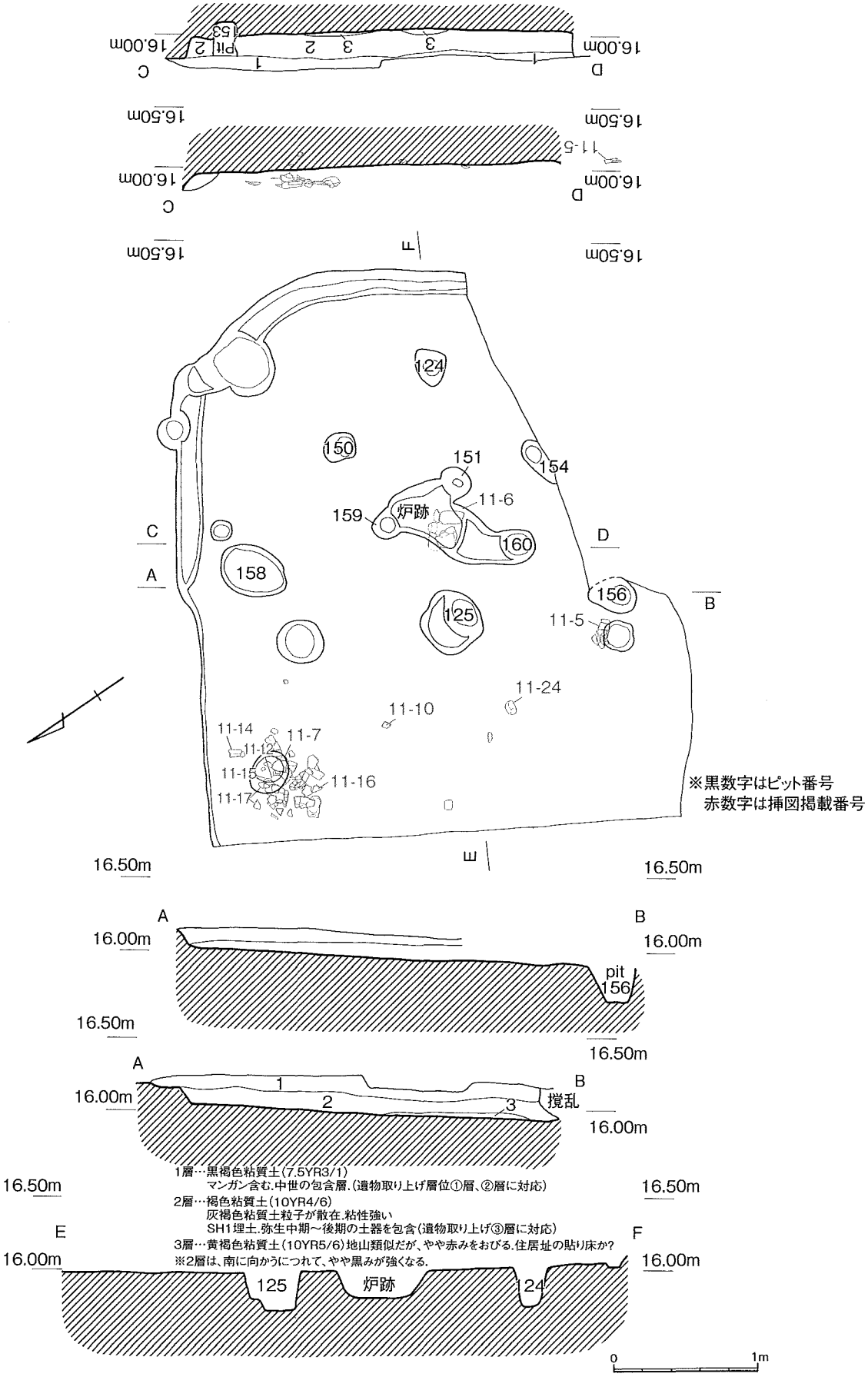
②層完掘時点で住居跡床面からピット群を検出した。中世のピット群が黒褐色系の覆土であるのに対し，竪穴住居跡床面から検出したピット群は褐色系で，検出状況も加味して竪穴住居跡を構成するピット群と考えた。ピット群の配置は，竪穴住居跡の際に沿って不整円形に巡っている。また。住居跡床面のほぼ中央で，不整楕円形の土坑を確認した。覆土には炭化物が多く混じっていることから，焼土の確認はできなかったものの炉跡と考えた。



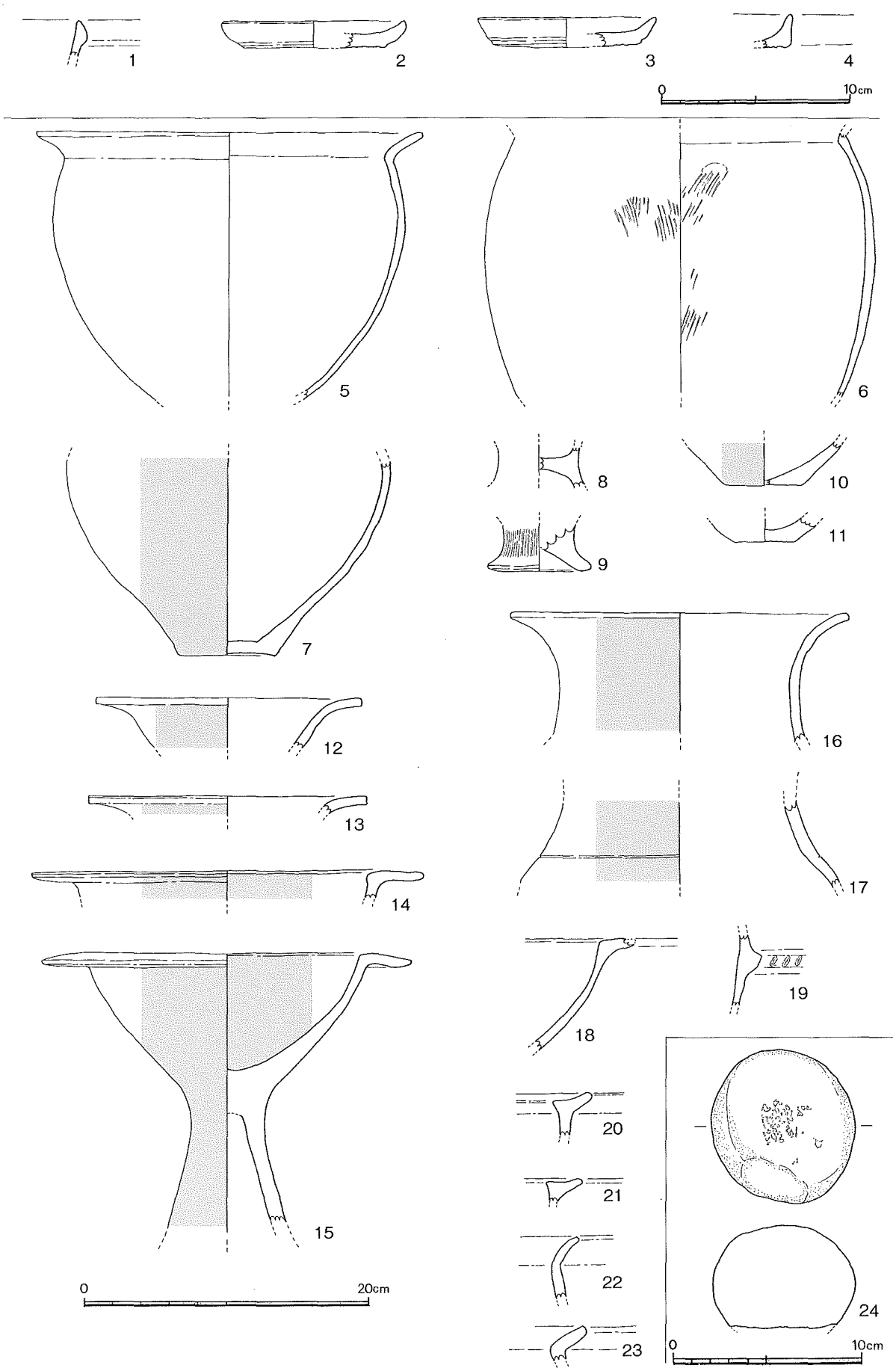
第９図　SH1周辺中世包含層（アミカケ）および中世ピット群検出状況（S=1/40）

東半部の床面には，住居跡の輪郭に沿うように排水溝と考えられる浅い溝が掘られている。竪穴住居北辺の輪郭がややいびつになっていることから，この溝は本来は西側まで延びており，調査時点で掘り足りなかった可能性が高い。

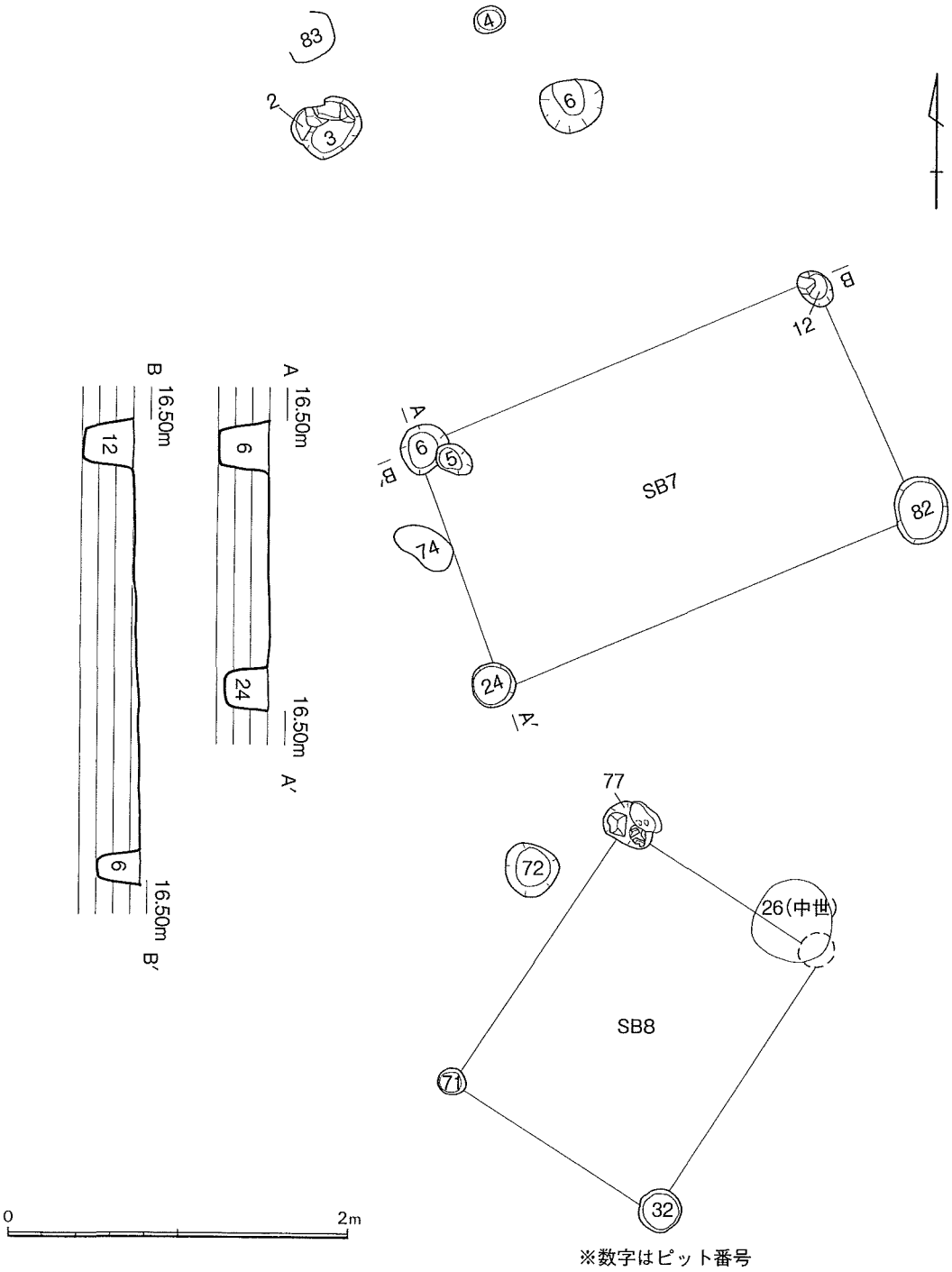
第11図5～24はSH1②層・③層から出土した遺物である。**5・6**は「く」の字口縁の甕形土器。**5**は南端部床面付近出土，**6**は炉跡検出面付近からの出土である。**7**は住居跡北西隅から出土した丹塗の壺形土器の胴部である。底部は厚みがなく胴部は大きく外側に張り出す。**8～11**は底部である。**8・9**は台付甕の底部で，**9**の外面には縦方向のハケメが観察できる。炉跡出土。**10・11**は壷形土器の底部と思われる。**10**の外面には丹塗が施される。**12～15**は高杯である。いずれも住居跡北西隅からの出土で，外面もしくは内外面に丹塗を施す。**16・17**は壷形土器で，いずれも住居跡北西部からの出土である。**16**はラッパ状に外反する口縁部，**17**は胴部から頸部にかけての資料である。**17**は，胴部から緩やかに頸部が立ち上がり，胴部と頸部の境に浅い沈線が1条巡る。**20・21**は口縁端部が上方に屈曲する甕形土器である。**22**は「く」の字口縁の甕形土器であるが，口縁部は直立気味に立ち上がる。**19**は壷形土器の胴部片で，突帯上にヘラ刻みを施す。**24**は住居跡から唯一出土した石器で，表面に粒の細かい敲打痕が集中している。以上，やや前後する時期の土器も若干含むものの，全体としては弥生時代中期末～後期初頭の土器群と捉えることができる。



第10図　SH1実測図（S=1/40）



第11図　SH1出土遺物（S=1/3・1/4）

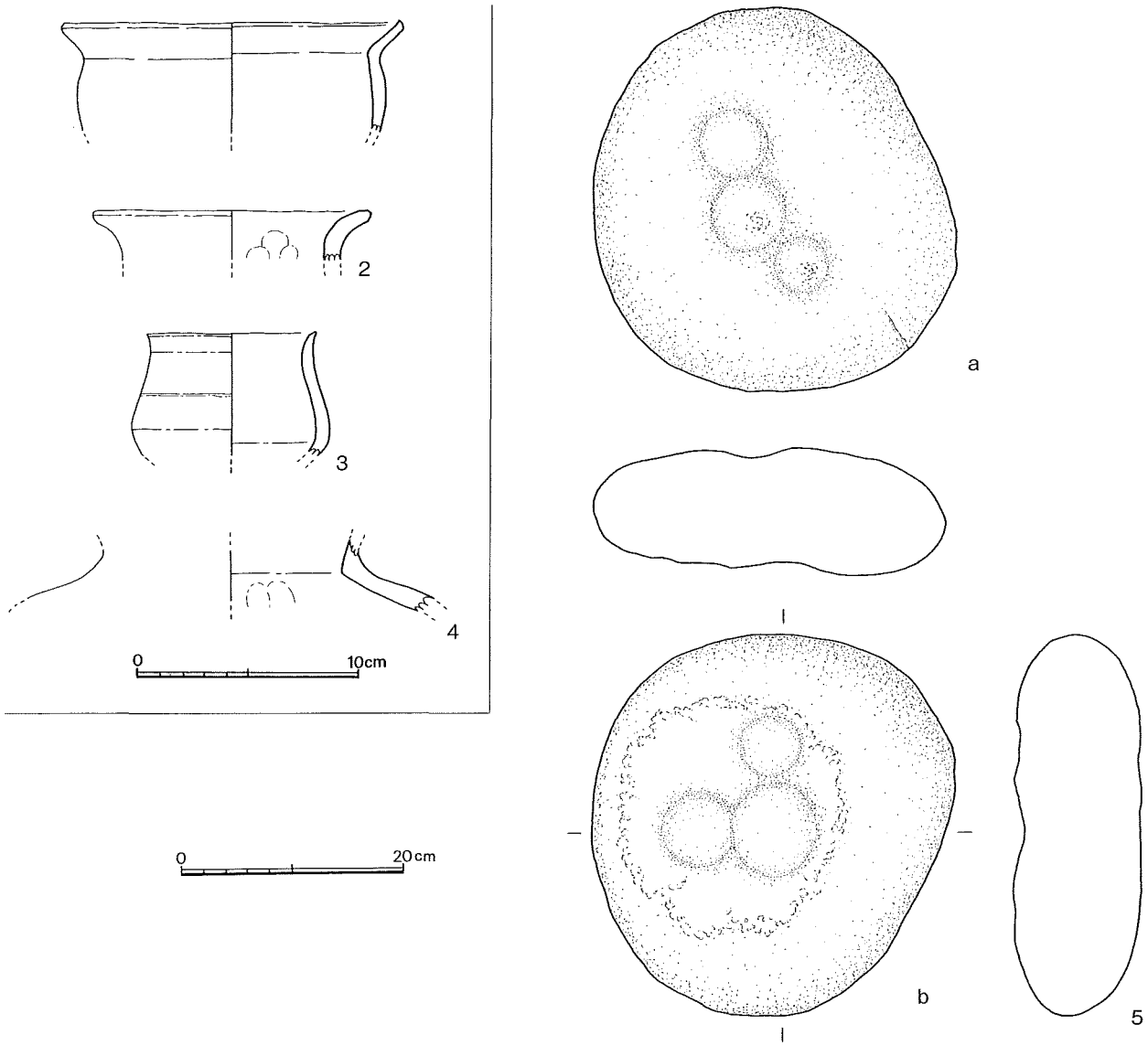


第12図　SB7・SB8実測図（S=1/40）

●掘立柱建物

・SB7（第12図）

北半部検出した遺構である。ピット6・ピット12・ピット24・ピット82の4つの柱穴で構成され，ほぼ長方形をなす。短軸長1.5m，長軸長2.5～2.7mである。図化に耐えうる遺物の出土はなかった。柱穴間の規模から倉庫跡の可能性が高い。



第13図　SB8および弥生時代ピット出土遺物（S=1/3・1/6）

・SB8（**第12図・第13図**）

SB7の南に隣接する遺構である。現況でピット32・ピット71・ピット77の3つのピットで構成されるが，本来は北東隅にもう一つ柱穴があり，中世のピット26によって削平されたものと推測される。短軸長1.5m，長軸長1.8mとなる。遺物はピット77から大量に出土しており，特に大型の台石の出土は注目される（**第13図5**）。SB8は現状から掘立柱建物と考えたが，遺物の出土状況を加味すれば，本来は竪穴住居跡で，後世に削平された可能性が高い。ピット77出土台石は，竪穴住居の床面で使用していた大型の台石を，住居跡の廃絶に伴ってピット内に廃棄したと考える方が自然であろう。

第13図はSB8およびその周辺の弥生時代ピットから出土した遺物である。**1・2**は「く」の字に外反する甕形土器の口縁部，**3**は精製の小型無頸壺である。いずれもピット77出土。**5**はピット77出土の台石で，a・b両面に3カ所の凹みを観察できる。b面の凹みの周囲には敲打面が広がる。**4**はピット3出土の壷形土器である。これらはいずれも弥生時代後期前半の遺物である。

②中世の遺構と遺物

中世の遺構の内訳は，ピット133基・土坑5基・不明遺構1基である。これら遺構群のうち，個別のピットの特徴については観察表にまとめたので参照していただき（**第2表・第3表**），ここでは何らかの構築物となりうるピットや，ピット以外の遺構についてのみ説明を加えることにする。

●掘立柱建物

・SB1（**第14図・第15図**）

北半部の発掘調査時に検出した遺構である。ピット23・26・36・39・45・48で構成され，2間×2間（＋α）の建物と考えられる（**第14図**）。柱間は2.5m～2.7m，ピットの床面標高は15.6～15.9m付近で，北から南に向かって徐々に深くなっており，これは自然地形の傾斜と一致する。一方で，ピット36の床面標高は16.1m前後と極端に浅く，直径も他のピットが50cm前後であるのに対して20cmと極めて小規模であることから，この柱穴は部屋の間仕切りなどに使われたものと推測され，建物を取り囲む主柱は東側の未調査区まで広がるものと考えられる。半裁したピットの土層観察では，ピット39・ピット45で柱痕が確認でき，その直径は15～20cmである（**第15図**）。柱痕の周囲には地山の黄褐色土がまだらに混じる粘質土が堆積しており，柱の裏込めと考えられる。

遺物は，ピット23・ピット39・ピット45・ピット48で出土している（**第15図**）ピット39では，床面付近と検出面直下で形態・サイズの類似した土師質土器の皿が出土しており（**3・4**），建物が廃絶する際に祭祀行為が行われた可能性がある。これらの土師質土器は，底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもので，器高もやや高めである。底面は回転糸切りで仕上げる。また，ピット45の床面からは柱材の一部が出土した（**6**）。樹種はイスノキで，a面～d面に入念なカット痕が残るものの，他の面は欠損している。c面およびd面には求心状のカット痕があり，特にc面はやや鋭角に整えている。d面のカット痕は，柱を抜き取る際に途中で断念し，折り取った痕跡であろうか。なお，この柱材についてはAMS年代測定を実施しており，較正年代でcalAD 1286-1398（測定誤差2σ）が得られた（第Ⅴ章参照）。その他の遺物としては，ピット48から朝鮮陶器（**5**），ピット23から土師質土器皿（**1**）が出土している。

・SB2（**第16図**）

北半部東側で検出した遺構である。現状でピット27・33・34・35・43・60で構成されるが，南東部のピット2基が未検出と考えられる。柱間は2mと1mで，2間×2間（＋α）に一面庇が付いた建物と考えられ，東側の未調査区まで広がるものと推測される。ピットの直径は25～40cm程度，床面標高は16.05～16.2mで，北から南に向かって徐々に深くなる。ピット34では柱痕が確認でき，直径は12cm前後となる。遺物はピット33・43・60から出土している。いずれも土師質土器の坏である（**1～4**）。

・SB3（**第16図**）

SB2の北側に隣接し，現状でピット16・18・73・SK2ピット1で構成される。東側の未調査区まで広がるものと推測され，1間×2間（＋α）の細長い建物になる。柱間は1.2～1.4mでSH2と主軸をほぼそろえる。ピットは直径15cm～60cmまで幅があるが，40cm前後のものが多い。床面標高にもばらつきがあり，建物の構造については不明な点が多い。図化に耐えうる出土遺物はないものの，SB2や後述する柵列と主軸をそろえることから，これらと同時期の遺構と考えられる。

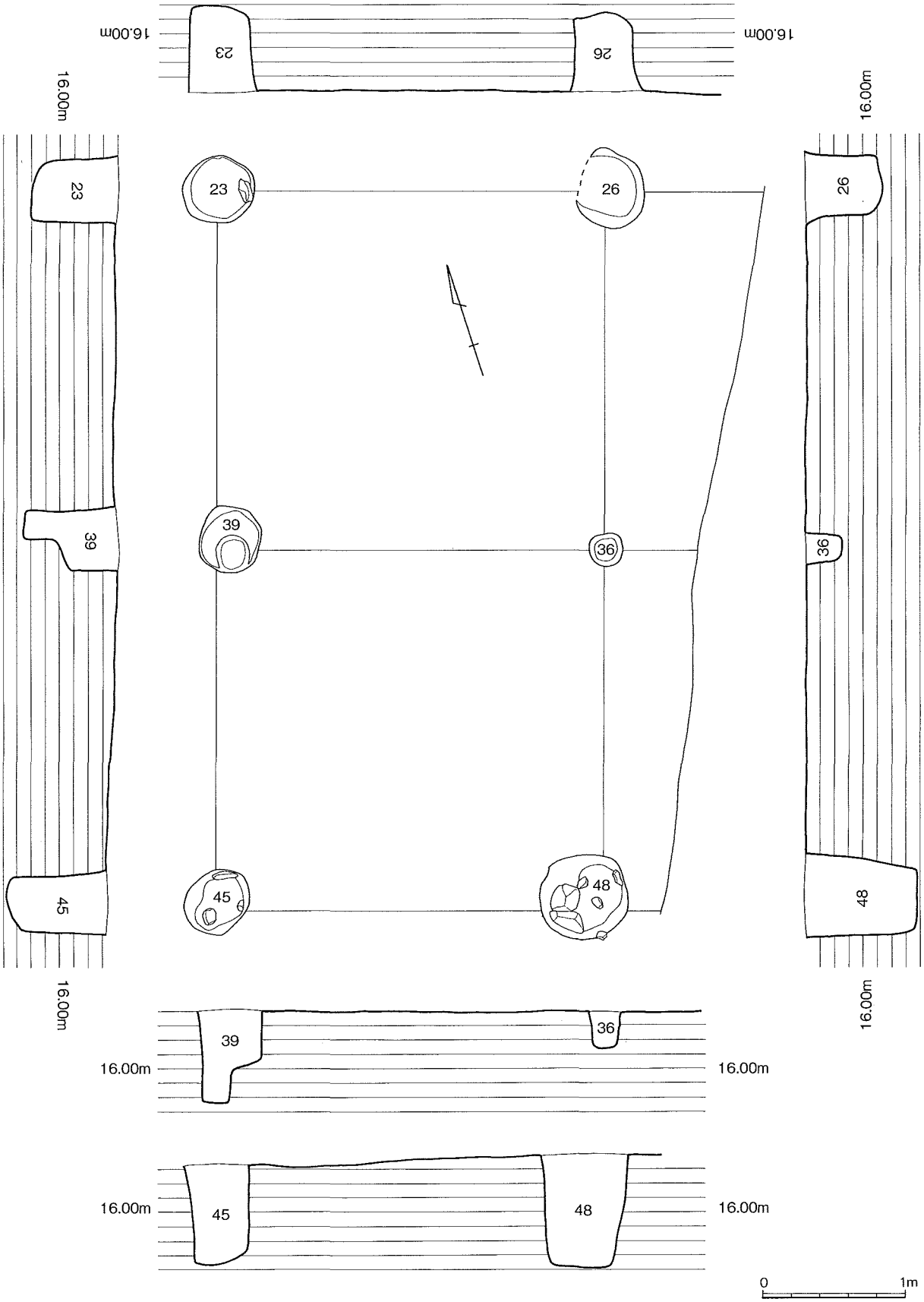
第２表　ピット観察表①

No.	直径（長軸径）	床面標高	柱痕の有無	柱の直径	構成遺構	出土遺物	時期
1	0.25	0.750				－	－
2	0.20	1.800				弥生土器（小片）	弥生
3	0.38	2.620				弥生土器（甕）	弥生
4	0.18	3.820				弥生土器（小片）	弥生
5	0.54	4.460			柵列	土師質土器（坏・皿）・白磁（坏）	中世
6	0.38	5.620				弥生土器（深鉢）	弥生
7	0.27	6.730				弥生土器・土師質土器	中世
8	0.16	7.840				－	－
9	0.17	8.830				弥生土器・土師質土器	中世
10	0.26	9.740				土師質土器	中世
11	0.42	10.580			柵列	土師質土器（坏）・須恵器・白磁（坏）	中世
12	0.23	11.770			SB7	弥生土器	弥生
13	0.39	12.610				土師質土器	中世
14	0.64	－				弥生土器・土師質土器（坏）	中世
15	0.77	14.230				弥生土器・土師質土器（坏）	中世
16	0.50	－			SB3	弥生土器・土師質土器	中世
17	0.19	16.810				－	－
18	0.35	－			SB3	－	－
19	0.39	18.610				－	－
20	0.40	19.600				土師質土器・石鍋破片	中世
21	0.28	20.720			SB4	土師質土器	中世
22	0.27	21.730				弥生土器・土師質土器（皿）	中世
23	0.50	22.500			SB1	弥生土器・土師質土器（坏）	中世
24	0.28	23.720			SB7	弥生土器（小片）	弥生？
25	0.27	24.730				土師質土器（坏）	中世
26	0.57	25.430			SB1	弥生土器・土師質土器（坏・皿）・青磁	中世
27	0.29	26.710			SB2	弥生土器・石鍋破片	中世
28	0.17	27.830				－	－
29	0.63	28.370	○	0.17	柵列	弥生土器・土師質土器（坏）・青磁	中世
30	0.29	29.710				土師質土器	中世
31	0.30	30.700			SB4	弥生土器・土師質土器	中世
32	0.25	31.750			SB8	弥生土器（小片）	弥生？
33	0.30	32.700			SB2	土師質土器（坏・皿）	中世
34	0.41	33.590			SB2・SB4	土師質土器（坏）	中世
35	0.29	34.710			SB2	土師質土器（坏）	中世
36	0.24	35.760			SB1	土師質土器（坏）	中世
37	0.25	36.750				土師質土器（坏）	中世
38	0.38	37.620				土師質土器（坏・皿）・青磁（皿）	中世
39	0.46	38.540	○	0.2	SB1	弥生土器・土師質土器・須恵器・瓦器・青磁・白磁	中世
40	0.34	39.660			SB4	土師質土器（坏）	中世
41	0.41	40.590				土師質土器（皿）・石鍋破片	中世
42	0.22	41.780				砥石	中世？
43	0.27	42.730			SB2	弥生土器・土師質土器（坏）	中世
44	0.58	43.420	○	0.16	柵列	土師質土器・須恵器・鉄製品	中世
45	0.49	44.510	○	0.12	SB1	土師質土器・青磁（合子）	中世
46	0.37	45.630				弥生土器・土師質土器・石鍋破片	中世
47	0.34	46.660				弥生土器・土師質土器（坏）	中世
48	0.64	47.360			SB1	土師質土器（皿）・陶器（甕）	中世
49	0.25	48.750			SB4	土師質土器（坏）	中世
50	0.27	49.730				土師質土器	中世
51	0.28	50.720			SB4	土師質土器・青磁	中世
52	0.35	51.650				土師質土器（坏・皿）	中世
53-a	0.26	15.980			SB4	弥生土器・土師質土器（坏）・ふいご羽口	中世
53-b	0.30	16.000					
54	0.37	53.630				土師質土器	中世
55	0.66	54.340	○	0.12	SB4・柵列	弥生土器・土師質土器（坏）	中世
56	0.33	－				弥生土器（小片）・土師質土器	中世
57	0.21	56.790			SB4	土師質土器（坏）	中世
58	0.20	57.800				－	－
59	0.26	58.740				弥生土器（甕）	弥生
60	0.22	59.780			SB2	土師質土器（坏・皿）・鉄滓	中世
61	0.14	60.860				土師質土器・石器剥片	中世
62	0.36	61.640				弥生土器・土師質土器（坏・皿）・石鍋破片	中世
63	0.38	62.620				弥生土器（小片）	弥生？
64	0.41	63.590			SB4	土師質土器（坏・皿）・石鍋破片	中世
65	0.35	64.650				土師質土器（坏・皿）・白磁・石鍋破片・鉄滓	中世
66	0.34	－				土師質土器・石鍋破片	中世
67	0.31	66.690				土師質土器（坏）	中世
68-a	0.35	16.044				弥生土器・土師質土器（坏・皿）・青磁	中世
68-b	0.36	16.033					
69	0.22	68.780				－	－
70	0.38	69.620				弥生土器・土師質土器（坏）	中世
71	0.17	－			SB8	弥生土器（甕）	弥生
72	0.34	71.660			SB4	弥生土器	弥生・中世
73	0.17	72.830			SB3	－	－
74	0.37	－				弥生土器（甕）	弥生
75	0.24	74.760				弥生土器（甕）	弥生
76	0.30	－			SB7	弥生土器（甕）	弥生
77	0.35	－			SB8	弥生土器（甕・鉢）	弥生
78	0.23	－				弥生土器・土師質土器	中世
79	0.45	－			SB4	土師質土器	中世
80	0.15	－				－	－

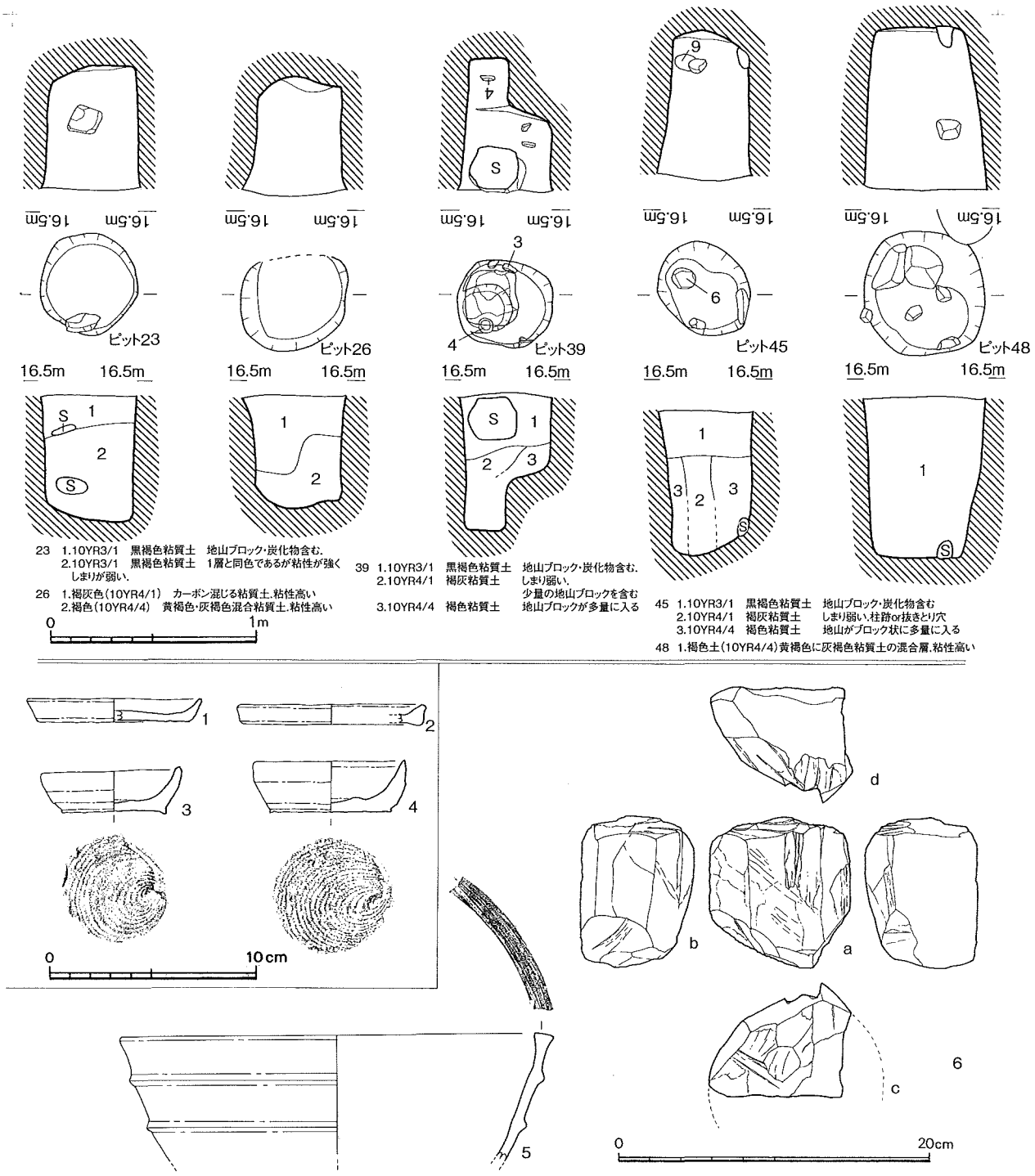
第3表　ピット観察表②

No.	直径（長軸径）	床面標高	柱痕の有無	柱の直径	構成遺構	出土遺物	時期
81	0.28	—				土師質土器（坏）	中世
82	0.40	—			SB7	弥生土器	弥生
83	0.33	—				弥生土器（甕）	弥生
84	0.45	—				土師質土器・青磁	中世
85	0.28	—				土師質土器（坏）	中世
86	0.29	85.710				土師質土器	中世
87	0.33	86.670				土師質土器	中世
88	0.38	87.620				土師質土器（皿）	中世
89	0.19	88.810				土師質土器（皿）・須恵器（坏蓋）	中世
90	0.26	89.740			SB6	—	—
91	0.30	90.700				土師質土器	中世
92	0.30	91.700				弥生土器・土師質土器	中世
93	0.44	92.560				—	—
94	0.46	93.540	○	0.16	SB5・柵列	土師質土器（坏）	中世
95	0.24	94.760				—	—
96	0.24	95.760				弥生土器・土師質土器・鉄製品	中世
97	0.37	96.630				弥生土器	弥生？
98	0.30	97.700				—	—
99	0.48	98.520				弥生土器（鉢）・ふいご羽口	弥生
100	0.41	99.590				土師質土器（坏・皿）・須恵器・石鍋破片	中世
101	0.25	100.750				—	—
102	0.21	101.790				弥生土器	弥生？
103	0.14	102.860				土師質土器	中世
104	0.45	103.550			SB6	土師質土器（坏）	中世
105	0.48	104.520			SB5・SB6	弥生土器・土師質土器（皿）	中世
106	0.29	105.710				土師質土器（坏）・須恵器	中世
107	0.52	106.480				土師質土器（坏）	中世
108	0.35	107.650			SB6	土師質土器（坏・皿）	中世
109	0.35	108.650				—	—
110	0.39	109.610				土師質土器	中世
111	0.28	110.720			SB5	—	—
112	0.19	111.810				—	—
113	0.39	112.610				—	—
114	0.59	113.410				弥生土器・土師質土器・須恵器	中世
115	0.78	114.220			SB5	土師質土器（坏）・須恵器（坏）	中世
116	0.32	115.680				土師質土器（坏・皿）	中世
117	0.43	116.570				土師質土器	中世
118	0.16	117.840				—	—
119	0.17	118.830				—	—
120	0.70	119.300				—	—
121	0.21	—				弥生土器・土師質土器（坏・皿）	中世
122	0.58	121.420				—	—
123	0.22	—				弥生土器・土師質土器	中世
124	0.28	123.720			SH1	弥生土器（甕）	弥生
125	0.40	124.600			SH1	弥生土器	弥生
126	0.21	—				弥生土器・土師質土器（坏）・鉄製品	中世
127	0.24	126.760				—	中世
128	0.48	127.520				—	中世
129	0.09	—				土師質土器（皿）	中世
130	0.30	129.700				—	—
131	0.45	130.550				土師質土器・擂鉢	中世
132	0.35	131.650				—	—
133	0.25	132.750				弥生土器・土師質土器（坏）	中世
134	0.44	133.560				弥生土器（甕）・土師質土器（坏）	中世
135	0.31	134.690				—	—
136	0.39	135.610				—	—
137	0.28	136.720				—	—
138	0.25	137.750				—	—
139	0.39	138.610			SB5・柵列	弥生土器・土師質土器（皿）・白磁	中世
140	0.61	139.390				弥生土器・土師質土器	中世
141	0.18	140.820				弥生土器・土師質土器	中世
142	0.44	141.560			SB5	—	—
143	0.27	142.730				弥生土器・土師質土器（坏・皿）	中世
144	0.51	143.490				—	—
145	0.48	144.520				土師質土器	中世
146	0.42	145.580				弥生土器・土師質土器（坏・皿）	中世
147	0.26	146.740				土師質土器（坏・皿）	中世
148	0.30	147.700				—	—
149	0.36	148.640				—	—
150	0.24	—			SH1	—	弥生
151	0.23	150.770			SH1	—	弥生
152	0.30	151.700				—	弥生
153	0.17	152.830				—	中世
154	0.33	153.670			SH1	—	中世
155	0.31	154.690				—	弥生
156	0.35	155.650			SH1	弥生土器・土師質土器（坏）	弥生・中世
157	0.20	156.800				—	中世
158	0.48	157.520			SH1	—	弥生
159	0.20	158.800			SH1	—	—
160	0.24	159.760				—	—
161	0.34	160.660				—	—
162	0.29	161.710				—	—

※数字の単位はすべて（m）である



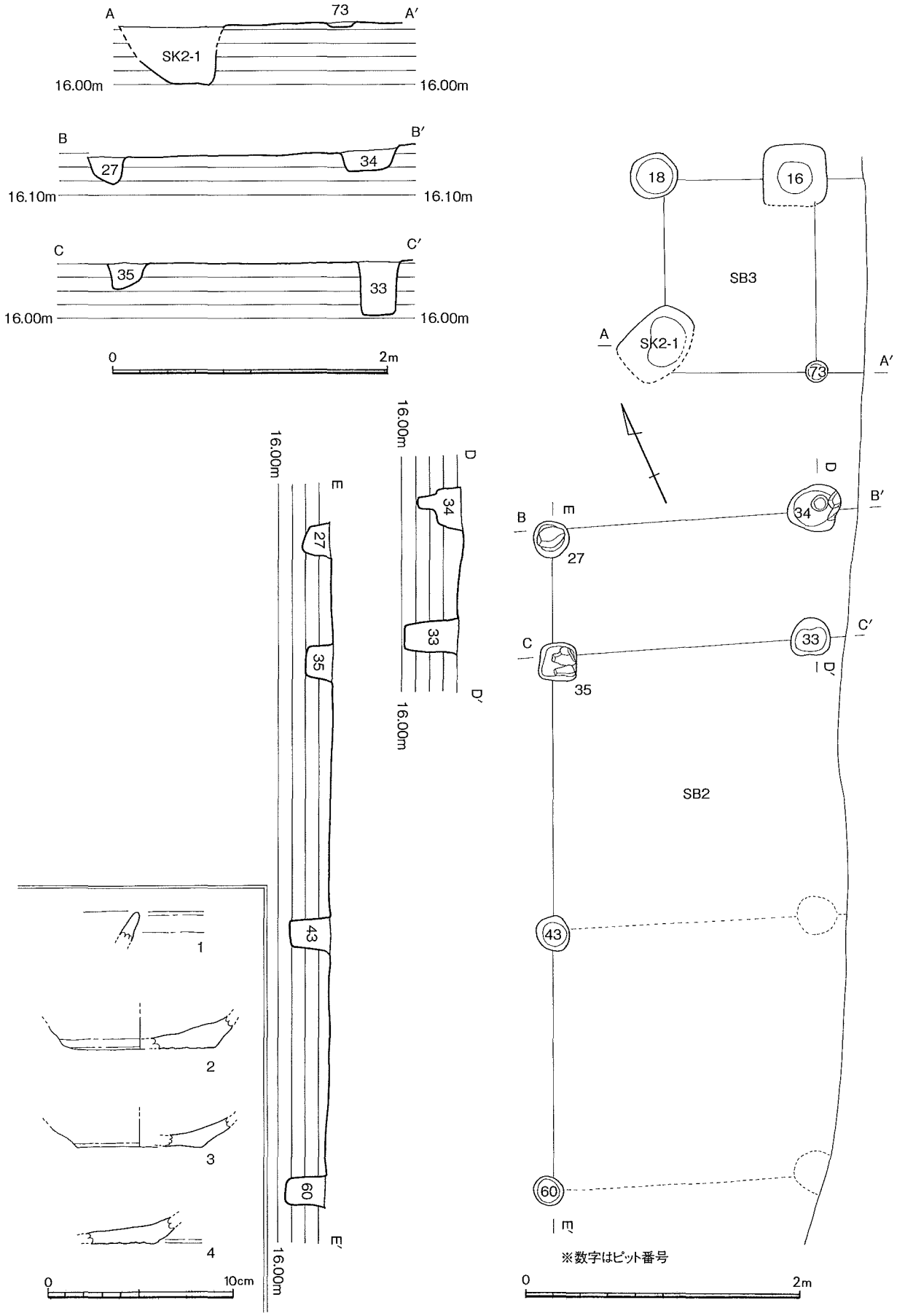
第14図　SB1実測図（S=1/40）



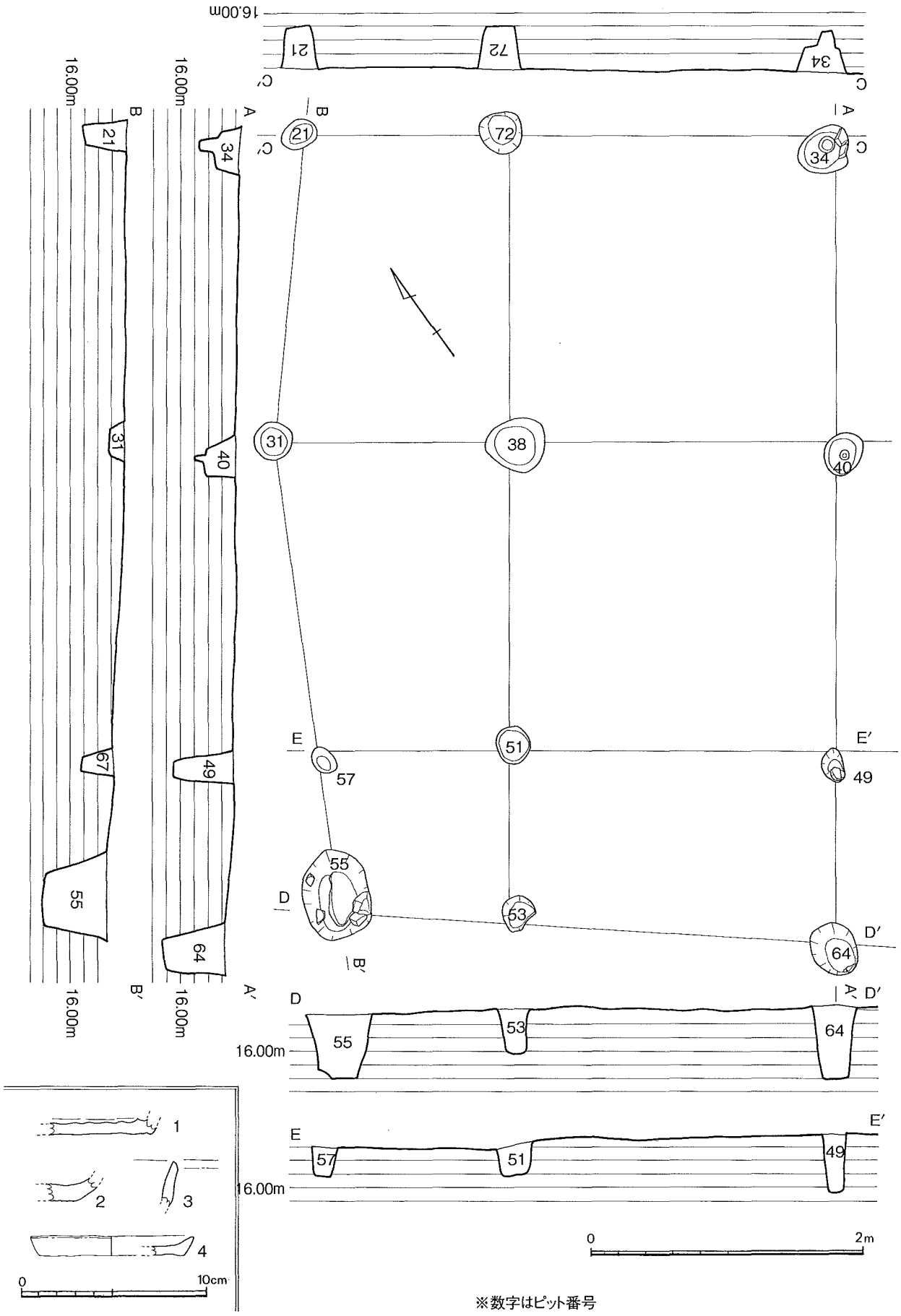
第15図　SB1ピット実測図（S=1/30）および出土遺物（S=1/3・1/4）

・SB4（**第17図**）

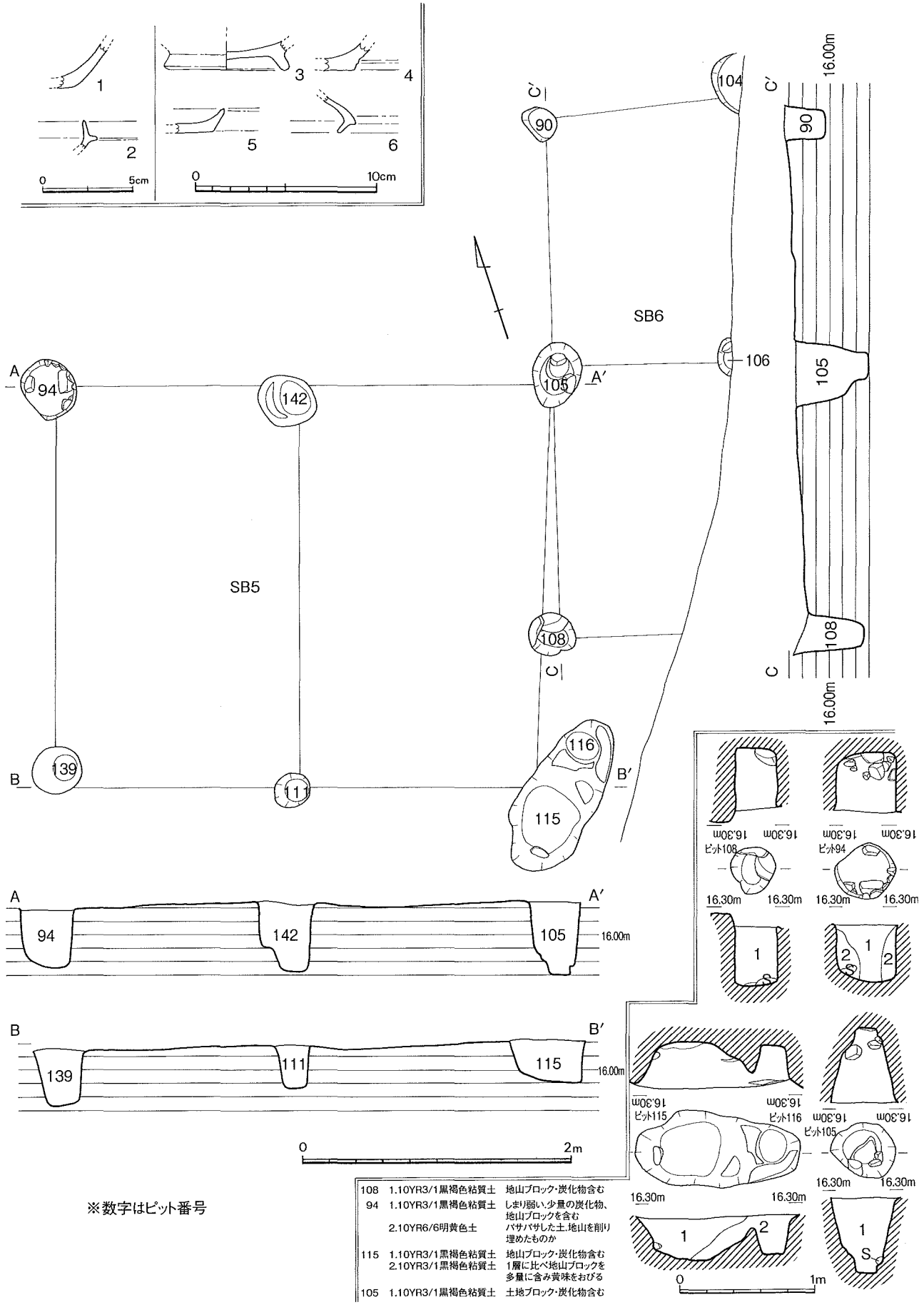
北半部中央部で検出した建物である。ピット21・31・34・38・40・49・51・53・55・57・64・72で構成される。柱間は2.3～2.4mと1.3～1.6mの2者があり，2間×2間（＋α）の建物の西と南に庇がつく二面庇の建物と考えた。建物自体は東側の未調査区へ広がるものと推測される。また，庇の部分は幅が一定しておらず，特に西側はいびつに外側に張り出している。柱穴の直径は25～60cmと幅があるが，床面標高は15.9～16.1mに収まるものが多い。ピット55は，後述する柵列を構成するピットでもあるが，SB4の他のピットと比べて直径も大きい上に極端に深く掘削されており，柵列に再利用され



第16図　SB2・SB3実測図（S=1/40）およびSB2出土遺物（S=1/3）

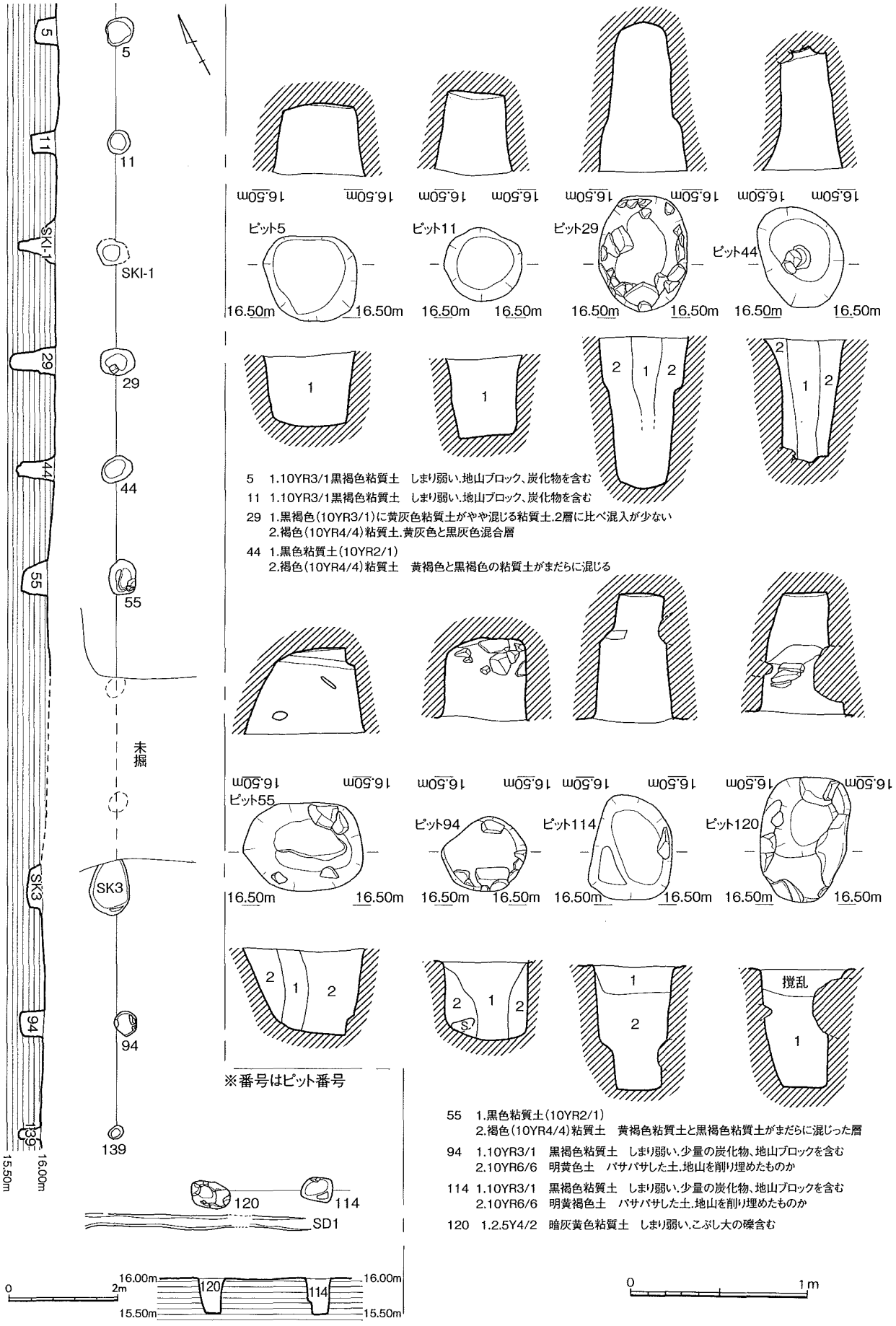


第17図　SB4実測図（S=1/40）および出土遺物（S=1/3）

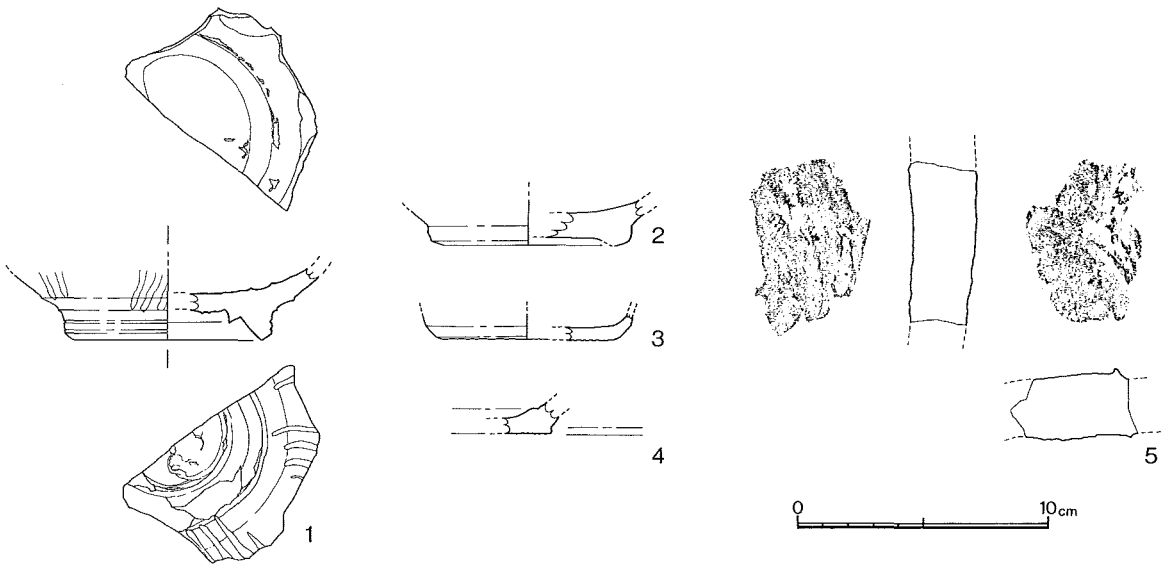


108	1.10YR3/1黒褐色粘質土	地山ブロック・炭化物含む
94	1.10YR3/1黒褐色粘質土	しまり弱い.少量の炭化物、地山ブロックを含む
	2.10YR6/6明黄色土	パサパサした土.地山を削り埋めたものか
115	1.10YR3/1黒褐色粘質土	地山ブロック・炭化物含む
	2.10YR3/1黒褐色粘質土	1層に比べ地山ブロックを多量に含み黄味をおびる
105	1.10YR3/1黒褐色粘質土	土地ブロック・炭化物含む

第18図　SB5・SB6実測図（S=1/40）およびピット実測図（S=1/40），出土遺物（S=1/3）



第19図　柵列実測図（S=1/100）およびピット実測図（S=1/30）



第20図　柵列出土遺物（S=1/3）

る時点で再掘削が行われたものと推測する。柵列とSB4の時間的前後関係を示唆する点で重要である。遺物はピット49・64から出土している。いずれも土師質土器の坏（**1～3**）と皿（**4**）である。

・SB5（**第18図**）

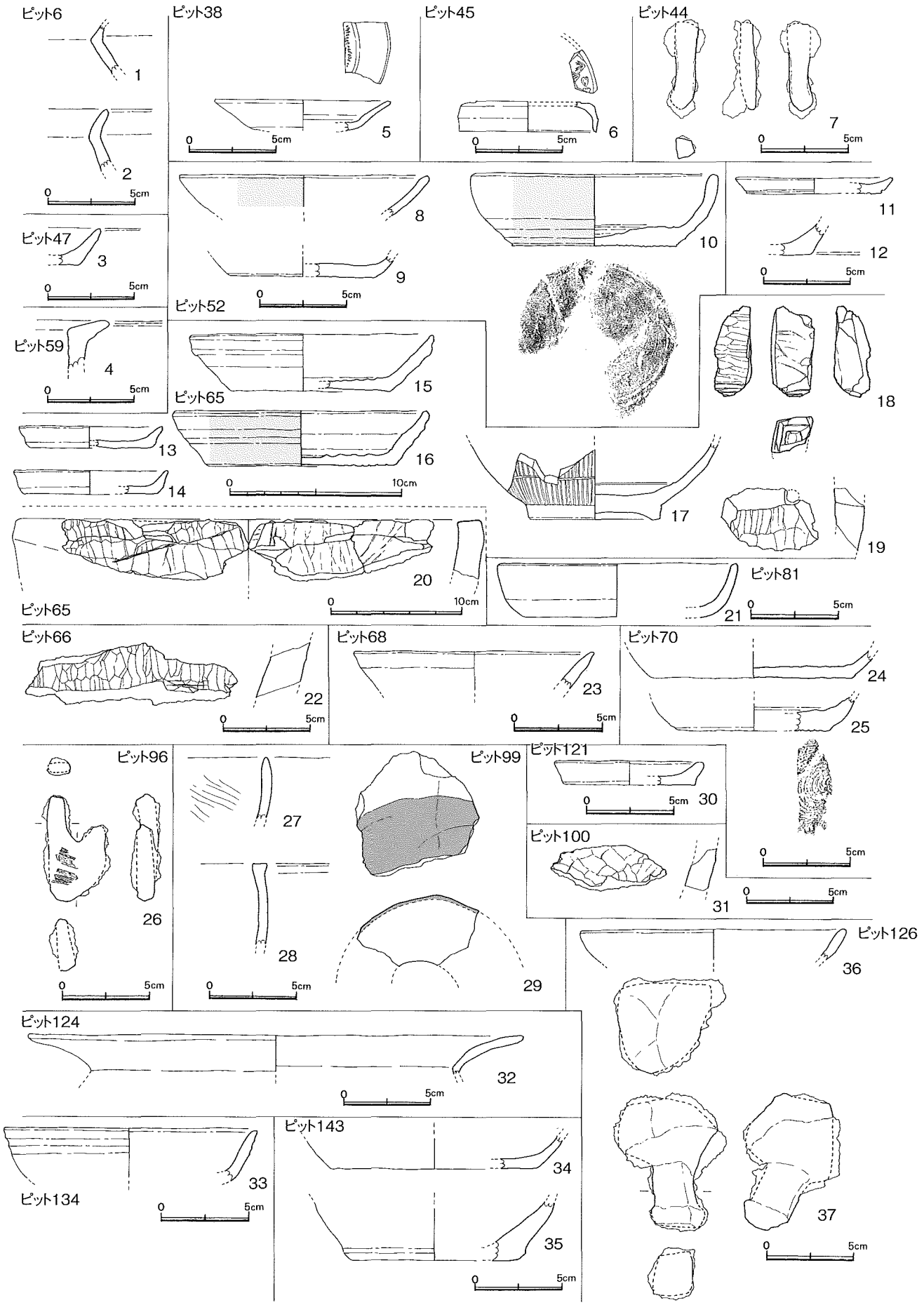
南半部で検出した遺構である。ピット94・105・111・115・139・142で構成される1間×2間の建物である。柱間は桁行が1.75m，梁間が3mで，SH1と主軸がほぼそろう。柱穴の直径は25～60cmとばらつきがあるが，床面標高は15.7～15.9mと比較的そろっている。半裁したピットの土層観察では，ピット94・ピット105で柱痕を確認したが，直径は15cm前後で周囲には地山類似の黄褐色粘土が裏込めされていた。遺物はピット115で出土している。須恵器の底部片（**1**）および坏口縁部片（**2**）である。いずれもやや古相を示す。

・SB6（**第18図**）

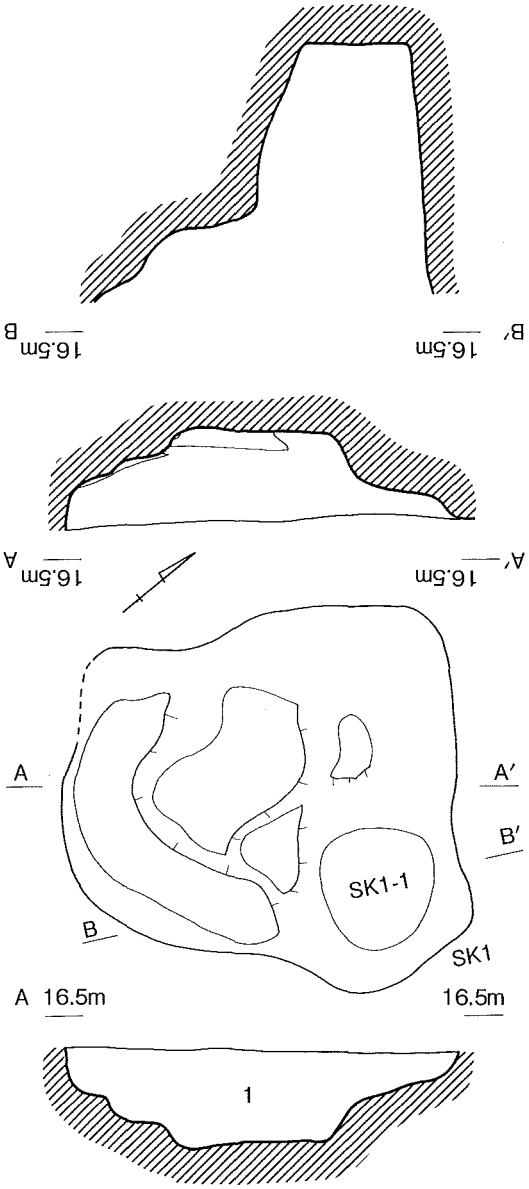
SB5とほぼ主軸をそろえ，東側に隣接する建物である。東側の未調査区まで広がるものと考えられるが，現況でピット90・104・105・106・108で構成される1間（＋α）×2間の建物である。柱間は2mと1.3～1.4mがある。ピットの直径は30～50cm，床面標高は15.7～16.0m前後である。ピット105はSB5を構成するピットでもあるが，直径，掘削深度ともにSB6の他のピットよりも大きく，SB5に再利用する際に再掘削が行われたものと推測される。SB6とSB5の前後関係を示唆する点で重要である。遺物はピット90・106・108から出土している。土師質の坏・皿（**4・5**）が主体であるが，内面黒色の坏（**3**）や須恵器の蓋（**6**）など，やや古相の遺物を含む。

●柵列（**第19図**）

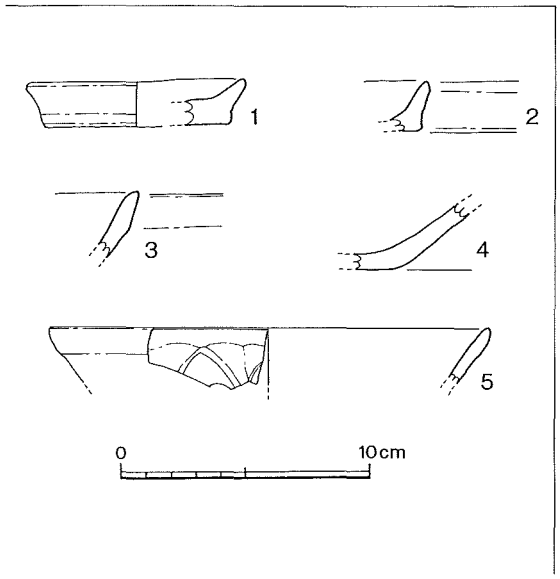
北半部から南半部にかけて展開する遺構である。調査区の西壁に沿って南北に直線上に並ぶピット群で，現況ではピット5・11・29・44・55・94・139・SK1ピット1・SK3で構成される（**第19図**）。柱間約2mで，北半部と南半部の間の未調査区にも，2基の関連するピットが存在するものと考えられる。また，北側の未調査区まで展開しているものと推測される。ピットの直径は30～65cmとばらつ

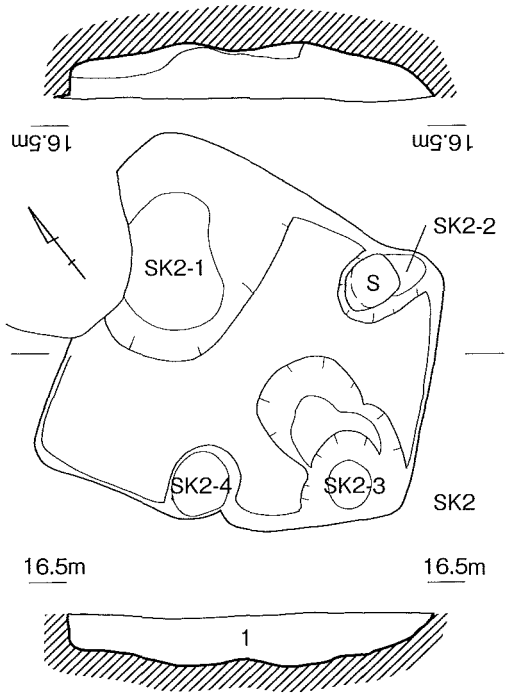


第21図　その他のピット出土遺物（S=1/3・1/4）

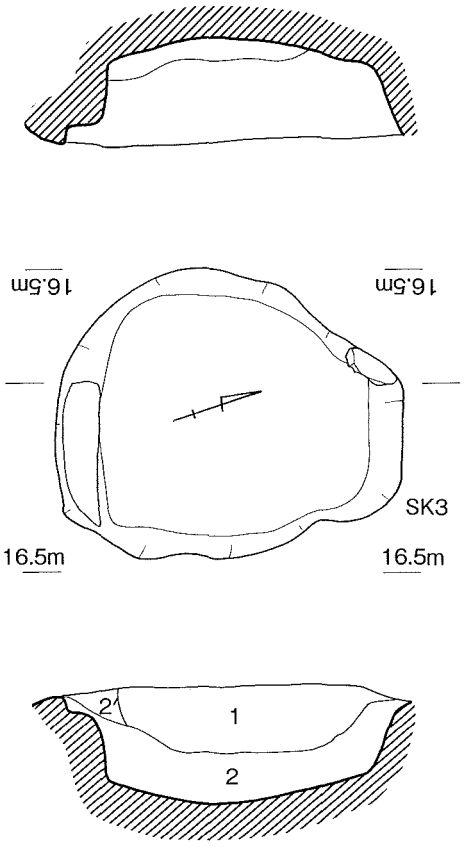


SK1　1.褐色(10YR4/4)粘質土　黄褐色土と黒褐色土の混合層





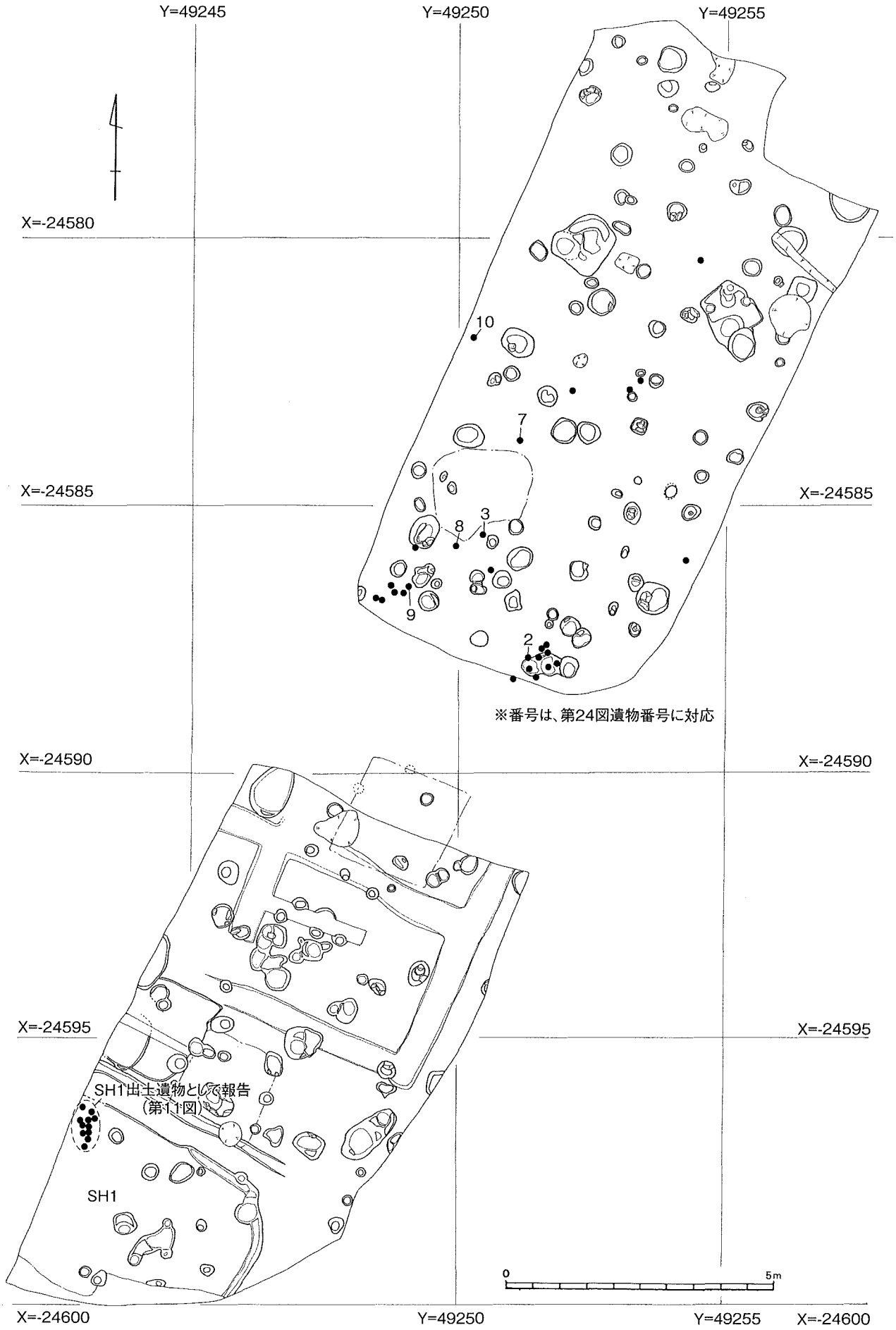
SK2　1.黒色(10YR2/1)粘質土　カーボン散在.部分的に黄褐色粘質土混じる



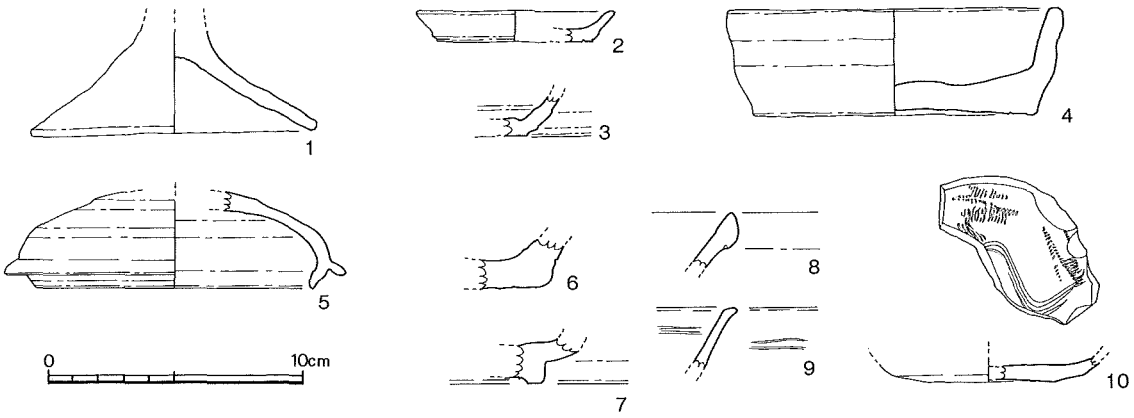
SK3　1.10YR3/1黒褐色粘質土　しまり弱い.少量の炭化物、地山ブロックを含む
2.10YR6/6　明黄色土　パサパサした土.地山を削り埋めたものか
2′2層に1層が混じる

0　1m

第22図　土坑実測図（S=1/20）および出土遺物（S=1/3）



第23図　遺構検出前の遺物出土状況（S=1/100）



第24図　包含層出土遺物（S=1/3）

きがあるが，50cm前後のものが主体となる。床面標高は15.5～16.0mに分布する。検出面の傾斜に沿って，北側から南側にかけて徐々に深くなる傾向にある。

これらの柵列と直行して柱間2mで並ぶ遺構を南半部で検出した。ピット114・120がこれで，直径60～70cm，床面標高は15.50m付近にあり，柵列を構成するピット群と同規模であることから，これらは東西に展開する柵列の一部と捉えた。また，ピット114・120に平行して東西にのびるSD1も関連する遺構と考え，合成して図化した（**第19図**）。SD1は幅約25cm，深さ10cm未満と非常に浅い。東側で途切れるのは削平によるもので，本来は東西方向に直線的にのびていたものと推測される。

柵列を構成するピット群を半裁して土層を観察したところ，ピット29・44・55・94で柱痕を確認することができた。直径15cm前後に復元でき，柱痕の周囲には地山類似の黄褐色粘質土がまだら状に混じる裏込めで充填している。また，ピットの内面に大小の礫が多数くい込んでいたが，これらのほとんどは，地山に含まれる玄武岩が露出したものであった。しかしこれらの一部には，裏込めに使われた礫も含まれているものと考えられる。

遺物はピット5・11・44・55から出土した（**第20図**）。**1**は淡黄色の胎土ににぶい黄色の釉が外面の体部上半と内面にかかる。見込は輪状に釉を掻き取り，砂止めの痕跡も残る。高台は外側に開き高台内面はヘラケズリの痕跡が螺旋状に残っている。体部外面には，幅広の浅い沈線が3本単位で縦方向にのびている。高台や文様の特徴・釉の発色から同安窯系青磁椀Ⅲ類と考えられる。**2**も白磁の底部で，灰白色の胎土に灰白色の釉がかかるが，高台付近には及んでいない。高台は低く削りだし，底部に厚みをもつ。大振りの玉縁口縁を持つ白磁椀Ⅳ類であろう。**3**・**4**は土師質土器で，**3**は皿，**4**は坏の底部である。**5**は厚手の平坦な粘土塊で，胎土には直径2cmを越える大振りの白色粒子や，スサとみられる植物繊維の痕跡が確認できる。表面は風化により観察が困難であるが，板状工具により長軸方向になで上げたような痕跡が確認できる。全体に橙色を呈すが，二次的な被熱を受けたものか。容器としては器壁の厚さや胎土が異なり，また柵列の壁材とするには厚さが薄すぎるように感じる。可能性としては瓦の一部が考えられる。

●その他のピット出土遺物（**第21図**）

ここでは特徴的な遺物について説明を加える。個々の遺物については観察表を参照されたい（**第4表・第5表**）。**1**・**2**・**4**・**27**・**28**・**32**は弥生土器である。**32**はSH1を構成するピット124からの出土

である。5は同安窯系青磁の皿である。見込に櫛描文が見える。6は青磁の合子蓋である。外面に透明感のある明緑灰色の釉がかかるが，口縁部付近にはかかっていない。上面に松傘文の浮き彫りがある。17は白磁椀Ⅳ類で，高台の削りが浅く底部が分厚い。内面見込に沈線が巡り，外面には縦方向の沈線が密に並ぶ。10・15・16は土師質土器の坏である。いずれも底部は回転糸切りによる。15・16は口縁部外面が若干肥厚する。18～20・22・31は滑石製石鍋およびその転用品である。20はピット20・62・65から出土したものが接合した例である。外面は斜め方向に沈線がのび，この沈線を境にして縦方向に入念に削っている。また，小口の欠損部分を二次的に研磨し，平坦に仕上げている。18は口縁部片の小口を求心状に削って折り取ったもの。19は体部片で穿孔が認められる例である。7・26・37は鉄製品である。7は棒状で断面は厚手の矩形となる。釘の一部か。26はU字状で断面は扁平。37は頭部が肥厚した鑿であろうか。29は鞴の羽口で，外面にはガラス質の滓が付着している。

●土坑（**第22図**）

・SK1

北半部の西側で検出した。平面不整方形で長さ90～95cm，深さ25cmである。SK1ピット1は柵列を構成するピットで，土坑床面よりも極端に深い。遺物は土師質土器坏（3），須恵器底部（4）連弁文のある龍泉窯系青磁椀（5）が出土している。

・SK2

北半部東側で検出した。平面不整方形で長さ95～65cm，深さ15cm前後である。床面には4基のピット群を検出したが，検出状況からSK2の方が新しいと考える。図化に耐えうる遺物は出土していない。

・SK3

南半部北西隅で検出した。平面楕円形で長軸長95cm，短軸長80cm，深さ30cmである。土坑としてあつかったが，先述の通り柵列を構成するピットの一つと判断した。遺物は出土していない。

この他，南半部西壁沿いでSK4・SK5を検出しているが，部分的な検出で全体の概要は把握できなかった。遺物は土師質土器の皿が出土しており（1・2），中世の土坑と考えられる。

●包含層出土遺物（**第23図・第24図**）

3層マンガン固結層から出土した遺物である。包含層での遺物の出土状況と遺構の検出状況を比較してみると（**第23図**），遺物が集中する箇所には遺構が絡んでいる場合が多く，これらは本来遺構に伴う遺物であったと考えられる。このうち，SH1の範囲から出土した弥生土器は**第11図**で報告済みのため，北半部の遺物を中心に説明を加える。

第24図1は弥生土器である。高杯の脚部であろう。2～4は土師質土器。2はピット65・66の周辺から出土しており，本来これらの遺構に伴うものであろう。4の坏底部は回転糸切りによる。5・6は須恵器。5はやや古手の蓋である。7・10は青磁である。7は高台内面の削りが浅く底面が分厚い龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。10は同安窯系青磁皿で見込に櫛目の文様をもつ。8は大振りな玉縁口縁を持つ白磁椀。9も白磁で薄手の体部から口縁端部が外反気味に屈曲している。櫛描の細い沈線文を内外面に施す。

第４表　遺物観察表①

土器・陶磁器類

図	番号	出土遺構	種類	器種	色調	胎土	調整	備考
5	1	TP3Pit2（148）	弥生土器	甕形土器	浅黄橙色 10YR8/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	2	TP1Pit1	土師質土器	皿	浅黄橙色 7.5YR8/4	石英・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	3	TP3SK1（120）	土師質土器	皿	橙色 5YR7/8	長石	回転ナデ	
	4	TP1　1層	土師質土器	皿	浅黄橙色 7.5YR8/3	長石	回転ナデ	
	5	TP3Pit3（111）	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/3	長石・雲母	回転ナデ	
	6	TP3　2層	白磁	椀	灰白色 2.5GY8/1			
	7	TP3　2層	白磁	椀？	灰白色 10Y8/1			
	8	TP2Pit1	青磁	椀？	灰白色 10Y7/1			
	9	TP3　2層	青磁	椀	灰オリーブ色 5Y5/3			龍泉窯系
	10	TP3Pit1（147）	白磁	椀	灰白色 10Y8/1	黒色粒子混じる		
	11	TP2　2層	青磁	椀	灰オリーブ色 5Y5/3	黒色粒子混じる		龍泉窯系
11	1	SH1 ①層	白磁	椀	灰白色 2.5GY8/1	黒色粒子含む	―	―
	2	SH1 ①層	土師質土器	皿	浅黄橙色 7.5YR 8/3	石英粒子含む	回転ナデ	底部回転糸切り
	3	SH1 ①層	土師質土器	皿	橙色 7.5YR 6/8	赤色粒子含む	回転ナデ	底部回転糸切り
	4	SH1 ①層	土師質土器	皿	浅黄橙色 7.5YR 8/6	石英粒子含む	回転ナデ	
	5	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	にぶい黄褐色 10YR5/3	石英・長石・雲母・角閃石	ハケメ・ナデ	
	6	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	黒褐色 10YR3/1	石英・長石・雲母	ハケメ・ナデ	
	7	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	橙色 7.5YR7/6	石英・長石・雲母	ナデ	表面丹塗
	8	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	浅黄橙色 10YR8/4	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	台付甕
	9	SH1 炉跡	弥生土器	甕形土器	明赤褐色 2.5YR5/8	石英・長石・雲母・角閃石	ハケメ・ナデ	台付甕
	10	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	浅黄橙色 10YR8/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	11	SH1 ①層	弥生土器	甕形土器	にぶい黄橙色 10YR7/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	12	SH1 ③層	弥生土器	高杯	浅黄橙色 10YR8/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	13	SH1Pit155	弥生土器	高杯	にぶい黄橙色 10YR7/4	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	14	SH1 ③層	弥生土器	高杯	明黄褐色 10YR7/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	15	SH1 ③層	弥生土器	高杯	にぶい黄橙色 10YR7/4	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	16	SH1 ③層	弥生土器	壺形土器	浅黄橙色 7.5YR8/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	17	SH1 ③層	弥生土器	壺形土器	橙色 7.5YR7/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	表面丹塗
	18	SH1 炉跡	弥生土器	高杯	にぶい黄褐色 10YR5/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	19	SH1 ③層	弥生土器	壺形土器	浅黄橙色 10YR8/3	石英・長石・雲母	ナデ	
	20	SH1 炉跡	弥生土器	甕形土器	灰黄褐色 10YR4/2	石英・長石・雲母	ナデ	肥後系
	21	SH1 炉跡	弥生土器	甕形土器	にぶい褐色 7.5YR5/4	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	肥後系
	22	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	浅黄橙色 10YR8/3	石英・長石・雲母	ナデ	内面圧痕有り
	23	SH1 ③層	弥生土器	甕形土器	灰黄褐色 10YR5/2	石英・長石	ナデ	
13	1	SB8Pit77	弥生土器	甕形土器	明赤褐色 2.5YR5/6	石英・長石・雲母	ナデ	
	2	SB8Pit77	弥生土器	甕形土器？	にぶい褐色 7.7YR5/3	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ・指押さえ	
	3	SB8Pit77	弥生土器	鉢？	橙色 7.5YR7/6	雲母	ナデ	
	4	Pit3	弥生土器	壺形土器	浅黄橙色 7.5YR8/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ・指押さえ	
15	1	3 層上面 P23	土師質土器	皿	橙色 5YR7/8	石英・雲母	回転ナデ	底部篦切り
	2	SB1Pit48	土師質土器	皿	浅黄橙色 10YR8/3		回転ナデ	
	3	SB1Pit39	土師質土器	皿	橙色 5YR6/8	長石	回転ナデ	底部糸切り
	4	SB1Pit39	土師質土器	皿	橙色 5YR7/6	長石	回転ナデ	底部糸切り
	5	SB1Pit48	陶器	甕	暗褐色 10YR3/4	長石	回転ナデ	口唇部ケズリ
16	1	SB2Pit60	土師質土器	坏	灰白色 7.5YR8/2	雲母	回転ナデ	
	2	SB2Pit33	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	雲母	回転ナデ	
	3	SB2Pit43	土師質土器	坏	橙色 5YR7/6	長石	回転ナデ	
	4	SB2Pit33	土師質土器	坏	浅黄橙色 10YR8/3		回転ナデ	
17	1	SB4Pit49	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	長石・雲母	回転ナデ	底部篦切り
	2	SB4Pit64	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/4	雲母	回転ナデ	底部糸切り
	3	SB4Pit64	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/6	長石	回転ナデ	
	4	SB4Pit64	土師質土器	皿	褐灰色 7.5Y4/1	長石	回転ナデ	
18	1	SB5Pit115	土師質土器	坏	橙色 5YR7/6	長石・雲母	回転ナデ	
	2	SB5Pit115	須恵器	坏	灰色 N5/1	長石	回転ナデ	
	3	SB6Pit106	土師質土器	坏	にぶい橙色 7.5YR7/4	長石	回転ナデ	内黒
	4	SB6Pit108	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/4		回転ナデ	底部糸切り
	5	SB6Pit108	土師質土器	皿	橙色 5YR6/6	長石・雲母	回転ナデ	底部糸切り
	6	SB6Pit90	須恵器	蓋	灰色 10Y6/1	長石	回転ナデ	
20	1	柵列 Pit5	青磁	椀	にぶい黄色 2.5Y6/4		ケズリ	同安窯系
	2	柵列 Pit11	白磁	椀	灰白色 5Y7/2		ケズリ	
	3	柵列 Pit44	土師質土器	皿	橙色 5YR6/8	石英・長石	回転ナデ	底部糸切り
	4	柵列 Pit55	土師質土器	坏	橙色 7.5YR6/6	長石・雲母	回転ナデ	底部糸切り
	5	柵列 Pit55	土師質	瓦？	浅黄橙色 7.5YR8/6	大型白色粒子・赤色粒子・雲母・角閃石・植物繊維	ナデ	
21	1	Pit6	弥生土器	甕形土器	橙色 7.5YR6/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	2	Pit6	弥生土器	甕形土器	浅黄橙色 10YR8/4	石英・長石・雲母・角閃石・白色粒子	ナデ	
	3	Pit47	土師質土器	皿	にぶい黄橙色 10YR7/3	石英	回転ナデ	

第５表　遺物観察表②

土器・陶磁器類

図	番号	出土遺構	種類	器種	色調	胎土	調整	備考
21	4	Pit59	弥生土器	甕形土器	灰黄褐色 10YR5/2	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	5	Pit38	青磁	皿	灰オリーブ色 5Y6/2	石英	ケズリ	同安窯系
	6	Pit45	青磁	合子（蓋）	明緑灰色 5G7/1	黒色粒子	回転ナデ	
	8	Pit52	土師質土器	坏	橙色 5YR6/6	角閃石	回転ナデ	表面丹塗
	9	Pit52	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	赤色粒子・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	10	Pit52	土師質土器	坏	橙色 5YR6/6	角閃石	回転ナデ	底部回転糸切り・表面丹塗
	11	Pit62	土師質土器	皿	橙色 7.5YR7/6	角閃石・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	12	Pit63	土師質土器	坏	浅黄橙色 10YR8/4	石英	ナデ	
	13	Pit65	土師質土器	皿	橙色 5YR6/8	雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	14	Pit65	土師質土器	皿	橙色 5YR7/8	雲母・石英	回転ナデ	底部回転糸切り
	15	Pit65	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	石英・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り・16と同一個体？
	16	Pit65	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	石英・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り・表面丹塗・15と同一個体？
	17	Pit65	白磁	椀	灰白色 7.5Y7/1	黒色粒子	ケズリ	
	21	Pit81	土師質土器	坏	にぶい橙色 7.5YR7/4	長石	回転ナデ	
	23	Pit68	土師質土器	坏	橙色 7.5YR6/6	雲母	回転ナデ	
	24	Pit70	土師質土器	坏	浅黄橙色 10YR8/4	赤色粒子	回転ナデ	底部篦切り
	25	Pit70	土師質土器	坏	橙色 7.5YR7/6	赤色粒子・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	27	Pit99	弥生土器	鉢	にぶい黄橙色 10YR7/4	石英・長石・雲母	ハケメ・ナデ	
	28	Pit99	弥生土器	鉢？	橙色 5YR7/8	石英・長石・雲母	ナデ	
	30	Pit121	土師質土器	皿	淡黄色 2.5Y8/3		ナデ	底部篦切り
	32	Pit124	弥生土器	甕形土器	橙色 5YR6/6	石英・長石・雲母・角閃石	ナデ	
	33	Pit134	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/6	長石・雲母・角閃石	回転ナデ	
	34	Pit143	土師質土器	坏	浅黄橙色 10YR8/4	赤色粒子	回転ナデ	
	35	Pit143	土師質土器	坏	橙色 5YR6/8	赤色粒子・雲母	回転ナデ	底部篦切り
	36	Pit126	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/3	赤色粒子・雲母	回転ナデ	
22	1	SK5	土師質土器	皿	橙色 5YR6/8	赤色粒子・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	2	SK4	土師質土器	皿	浅黄橙色 10YR8/4		回転ナデ	
	3	SK1	土師質土器	坏	浅黄橙色 7.5YR8/4	赤色粒子	回転ナデ	
	4	SK1	須恵器	壺？	灰色 10Y6/1	石英・雲母	ナデ	
	5	SK1	青磁	椀	灰オリーブ色 7.5Y5/3		ケズリ	
24	1	南半部４層	弥生土器	台付鉢？	にぶい黄橙色 10YR7/4	石英・長石・雲母	ナデ	
	2	３層上面 P27	土師質土器	皿	橙色 5YR7/8	赤色粒子・雲母	回転ナデ	
	3	３層上面 P17	土師質土器	坏	橙色 5YR6/8	赤色粒子・雲母・角閃石	回転ナデ	
	4	不詳	土師質土器	坏	橙色 7.5YR6/6	赤色粒子・雲母	回転ナデ	底部回転糸切り
	5	南半部３層	須恵器	坏	灰色 10Y6/1	石英	回転ナデ・回転ヘラケズリ	
	6	３層上面 P37	瓦質土器	甕？	黄灰色 2.5Y5/1	石英・長石	ナデ	
	7	３層上面 P2	青磁	椀	オリーブ色 5Y5/4	黒色粒子	ケズリ	龍泉窯系
	8	３層上面 P7	白磁	椀	灰白色 5Y7/2	黒色粒子	ケズリ	
	9	３層上面 P9	白磁	椀	灰色 10Y7/1		ケズリ	
	10	３層上面 P1	青磁	皿	灰オリーブ色 7.5Y6/2	石英	ケズリ	同安窯系

石器・石製品・木製品・土製品・金属製品

図	番号	出土遺構	種類	器種	長さ / 幅 / 厚さ（cm）	重さ（g）	備考
5	12	TP3Pit4（110）	石製品	滑石製石鍋	底径 18.6/ 厚さ 2.0	2,250	
11	24	SH1 ③層	石器	敲石	8.1/7.5/5.4	467.5	
13	5	SB8Pit77	石器	台石	31.5/33.3/11.0	16,200	
16	6	SB1Pit45	木製品	木柱	9.7/9.1/7.3	377.5	
21	7	Pit44	鉄製品	棒状鉄製品	5.5/2.3/2.2	17.51	
	18	Pit65	石製品	棒状滑石製品	5.05/2.4/2.0	32.51	石鍋転用品
	19	Pit65	石製品	石鍋片	3.45/5.4/1.65	29.7	穿孔有り
	20	Pit65・62・20	石製品	石鍋	口径 17.5/ 器高 4.4（+）	213.18	一部再加工
	22	Pit66	石製品	石鍋片	3.6/11.9/2.2	118.06	
	26	Pit96	鉄製品	U 字状鉄製品	6.0/3.8/1.75	35.6	
	29	Pit99	土製品	ふいご羽口	外径 5.3/ 内径 2.7	136.2	
	31	Pit100	石製品	石鍋片	2.5/6.5/1.25	34.24	
	37	Pit126	鉄製品	T 字状鉄製品	7.65/6.25/6.45	235.36	

第Ⅳ章　まとめ

1．遺構群の変遷

今回の調査では，ピット群を中心におびただしい数の遺構を検出した。また，従来周知されていた中世の遺構以外に弥生時代の遺構も確認することができ，長期間にわたって生活が営まれていたことが明らかとなった。ここでは，昭和46年度調査時における検出遺構も含めて，遺構群を時期別に整理して集落の変遷を検討する（**第25図**）。

（1）弥生時代

調査区南端部の竪穴住居跡（SH1）および北端部付近の掘立柱建物（SB7・SB8）で構成される。調査区北東隅にも掘立柱建物と考えられるピット群が直角に巡っており，本来は北側へも遺構群が展開している可能性が高い。また，遺構の項で述べたとおり，SB8は削平を受けた竪穴住居の可能性が高く，この時期の遺構群の構成としては，竪穴住居2棟，掘立柱建物1棟（＋α）となる。弥生時代の中でも，中期末～後期初頭のSH1に対して，SB7・SB8は後期前葉まで下る可能性が高く，弥生時代の中でも時期的な変遷が想定されるが，竪穴住居＋掘立柱建物という弥生時代の基本的な建物構成であったと考えることができよう。

（2）中世Ⅰ期

中世の遺構群は，出土遺物から12世紀後半～13世紀を中心とするものと考えられる。これらの遺構群の変遷は，建物関係の主軸がそろう遺構をある時期のセットと捉え，ピットの切り合いを加味してⅠ期～Ⅲ期の変遷を考えた。中世Ⅰ期は二面庇を持つSB4が該当する。建物の主軸はN39°Eである。

（3）中世Ⅱ期

SB2・SB3の東側と南側を，柵列およびSD1が囲む構成となる。SB2は一面庇を持つ建物で，北側に隣接するSB3は蔵であろうか。遺構の主軸方向はN22.5°Eである。

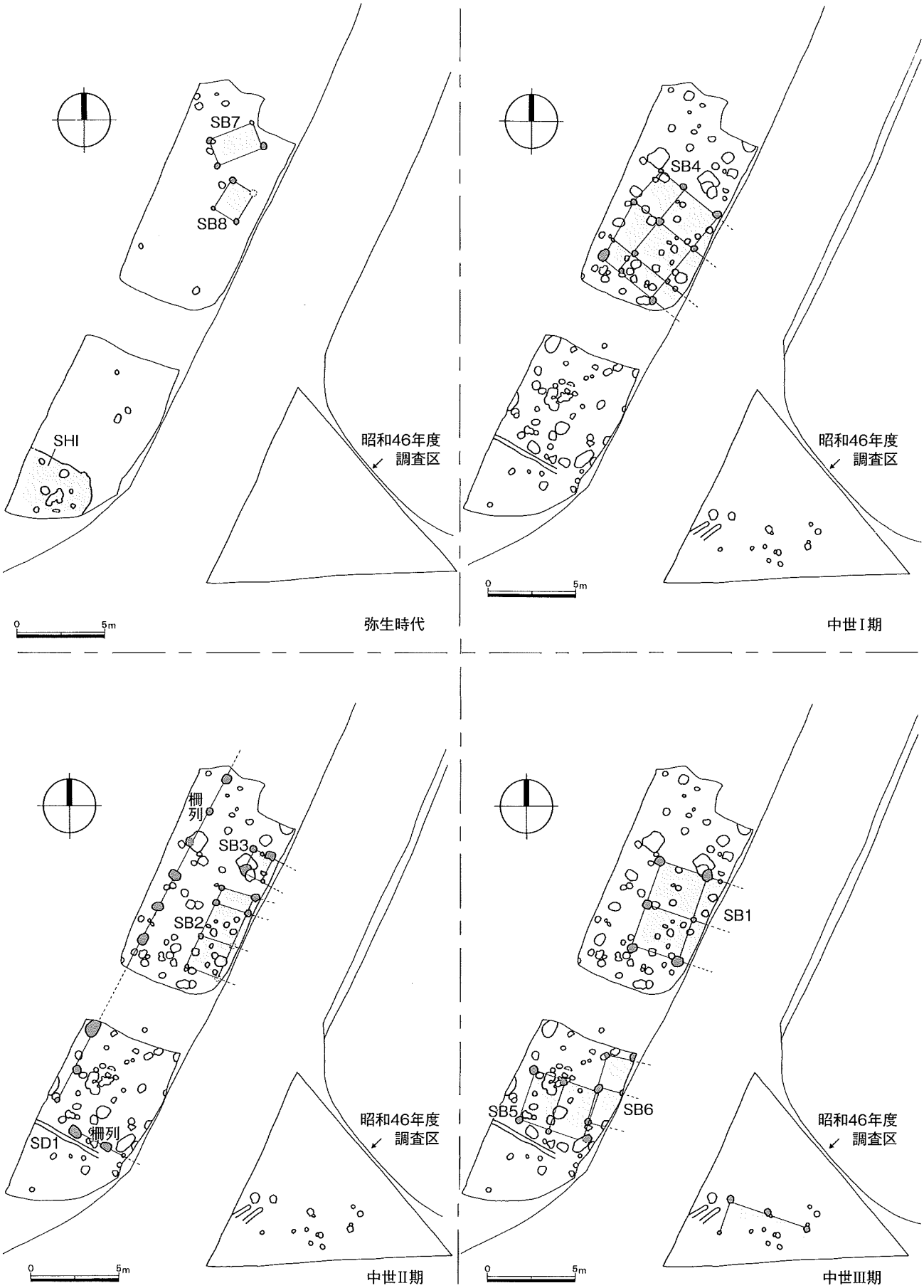
（4）中世Ⅲ期

SB1・SB5・SB6で構成される。昭和46年度調査時検出ピットの中にもこれらの遺構と主軸が一致する建物が含まれ，東側への建物の展開が顕著となる。建物の主軸方向はN19.5°Eである。出土遺物からは13～14世紀まで下るものと思われる。

このように，中世における遺構群は，主軸を次第に東から北側に移しながら変遷していることが分かる。また，建物自体も庇を持つものから持たないものへ，構造も1間×2間程度の蔵と考えられる建物が増えてくる傾向にある。

2．中世遺構群の性格

開遺跡周辺には，安養寺という天台宗寺院があったとの言い伝えが残されており，現在の字名にも残っている。また，1574年勧請の江ノ浦神社は，当初は開名宮園にあったとされる。今回検出した遺構群とどのように関連するかは不明であるが，付近に現存する石塔群や大規模な柵列，柵列のピット内から見つかった瓦片と思われる遺物など，今後検討する余地は十分にあるものと考えられる。



第25図　遺構群の変遷（S=1/300）

第Ⅴ章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

開遺跡（長崎県諫早市飯盛町開名所在）は，江浦川右岸の河岸段丘上に立地し，背後には山地が迫っている。今回の発掘調査の結果，弥生時代の竪穴住居跡や中世の柱穴等が検出されている。今回の分析調査では，弥生時代の竪穴住居跡から水洗選別によって得られた炭化種実の種類を知り，当時の植物利用に関する情報を得る。また柱穴から出土した木材の樹種同定と年代測定を実施し，その時代観や木材利用に関する情報を得る。

1．試料

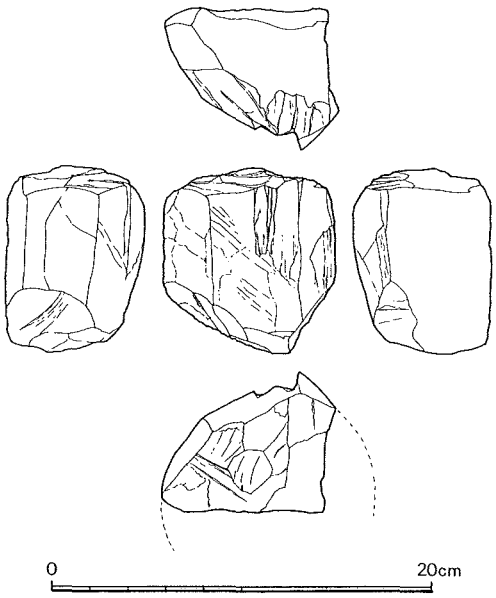
種実同定の試料は，弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居内炉跡と考えられる土坑内から検出された炭化物数粒である。樹種同定ならびに放射性炭素年代測定の試料は，ピット45から出土した木材1点である（**第26図**）。

2．分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

表面の汚れをピンセット，超音波洗浄など等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムなどを用いて，試料内部の汚染物質を化学的に除去する。

試料をバイコール管に入れ，1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにてCO2を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO2と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し，グラファイトを生成する。



第26図　ピット45出土木材実測図（第14図から転載）（S=1/4）

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に13C/12Cの測定も行うため，この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代

（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma；68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

(2) 種実同定

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，同定可能な種実を抽出する。分析後の試料は，袋に戻して返却する。

(3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。作製したプレパラートは，生物顕微鏡で木材組織を観察し，その特徴から種類を同定する。なお，同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については，島地・伊東（1982），Wheeler他（1998）を参考にする。また，木材組織の配列の特徴については，林（1991），伊東（1995,1996,1997,1998,1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

3．結果

（1）放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果は，630± 30BPである（**第6表**）。暦年較正とは，大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動，及び半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては，本来10年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1年単位で表している（**第7表**）。暦年較正は，測定誤差σ，2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存

第6表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	補正年代 BP	δ 13C (‰)	測定年代 BP	Code No.	測定機関番号
ピット45	木材（イスノキ）	630 ± 30	-23.31 ± 0.82	600 ± 30	9534-1	IAAA-62324

1）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用。
2）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
3）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

第7表　暦年較正結果

試料	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）													相対比	Code No.
ピット45	631 ± 34	σ	cal	AD	1,295	-	cal	AD	1,319	cal	BP	655	-	631	0.382	9534-1
			cal	AD	1,351	-	cal	AD	1,390	cal	BP	599	-	560	0.618	
		2σ	cal	AD	1,286	-	cal	AD	1,398	cal	BP	664	-	552	1.000	

1）計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02（Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer）を使用
2）計算には表に示した丸める前の値を使用している。ただし、IAAA-30564 は丸めた値を用いている
3）1 桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線やプログラムが改定された場合の再検討がしやすいように、1 桁目を丸めていない。
4）統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2σは 95%である
5）相対比は、σ、2σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

在する範囲，2σは真の値が95％の確率で存在する範囲である。また，表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれ1とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。暦年較正値は，測定誤差がσの場合はcalAD1295-1390，測定誤差が2σの場合はcalAD 1286-1398である（**第7表**）。したがってこの柱材は，13～14世紀頃のものである可能性がある。今後出土遺物等を含めて検討されたい。

（2）種実同定

種実の可能性がある微細片が1点，炭化材8点，種類・部位ともに不明の植物片1点が確認された。種実の可能性がある微細片は，黒色，大きさ2mmの不定形で内側に湾曲している。厚さ0.2mm程度，断面は柵状。表面は粗面。種皮または果皮の一部の可能性があるが，微細片のため種類の特定には至らなかった。

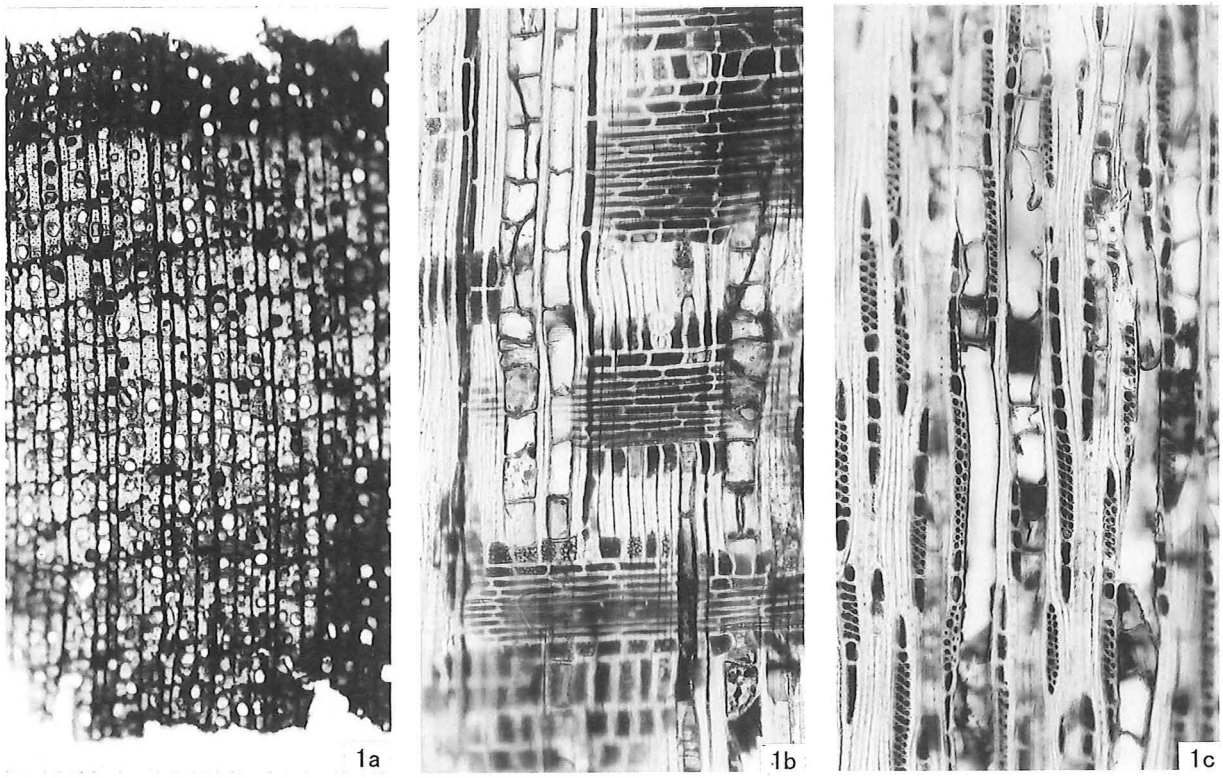
（3）樹種同定

柱材は広葉樹のイスノキに同定された。解剖学的特徴等を記す（**PL1**）。

・イスノキ（Distylium racemosum Sieb. et Zucc.）　マンサク科イスノキ属

散孔材で，道管は横断面で多角形，ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し，段数は5段前後となる。放射組織は異性，1-3細胞幅，1-20細胞高。柔組織は，独立帯状または短接線状で，放射方向にほぼ等間隔に配列する。

PL 1　木材組織写真



1.イスノキ（ピット45；木柱）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
200μm:b,c

4．考察

建物跡を構成するピット45から出土した木柱は，常緑広葉樹のイスノキであった。イスノキの木材は，極めて重硬・緻密で強度・耐朽性が高く，加工は困難であるが，割れにくい（平井1996）。このことから，強度・耐朽性に優れた木材を柱材に利用していたことが推定される。

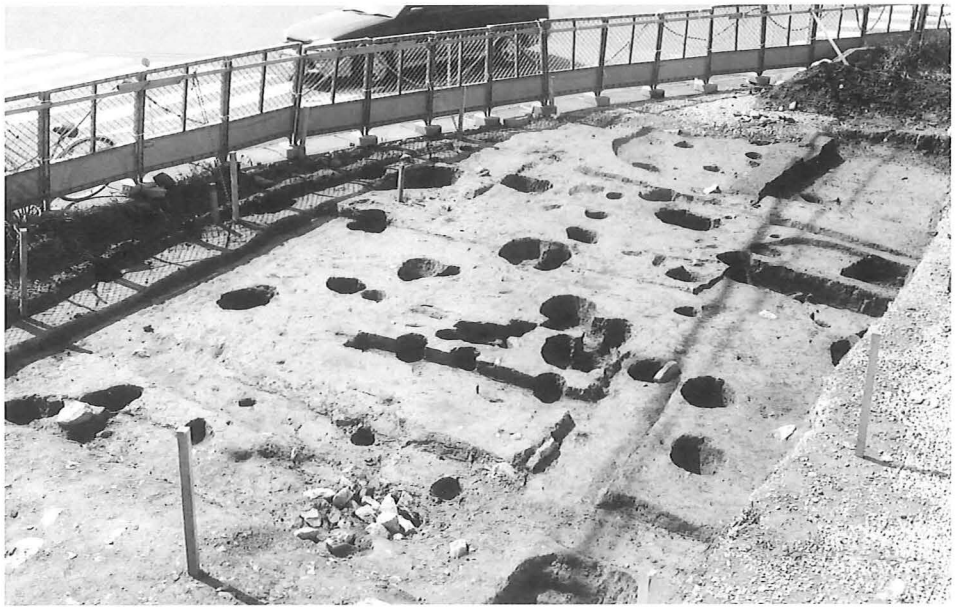
イスノキの木材は，各時代時期の遺跡から度々出土する樹種であるが，出土例の多くは櫛である。イスノキの櫛の中には，現在自生していない東北地方などから出土した例も知られており，櫛が製品として広い範囲に運ばれていたことが示唆される。一方，柱材等の建築部材としての出土例は少なく，元々イスノキが自生している九州地方で4世紀以前の柱材や16～17世紀の建築材とされる資料が数例知られているのみである（山田1993）。今回と同時期の柱材にイスノキが利用された例は，周辺で出土材の樹種同定がほとんど実施されていないこともあり，ほとんど知られていない。今後，資料を蓄積することでイスノキが自生する地域での利用状況が明らかになることが期待される。

種実試料は，果皮の破片と思われる１点を除いて全て炭化材であった。いずれも微細片であり，電子顕微鏡などを用いた樹種同定をできるような状態ではなかったため，実体顕微鏡で可能な範囲での同定を試みた。観察の結果，広葉樹（散孔材）が３点，広葉樹が１点，不明が３点であった。散孔材とした中には，道管径や道管の分布密度が異なる試料が認められることから，少なくとも２種類が含まれていると思われる。

【引用文献】

林　昭三1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
平井信二1996『木の大百科　解説編』朝倉書店642p
伊東隆夫1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所81-181.
伊東隆夫199『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所.66-176.
伊東隆夫1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所83-201.
伊東隆夫1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所30-166.
伊東隆夫1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所47-216.
島地　謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社176p
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）1998『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）海青社122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.
山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成　－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号　植生史研究会　242p.

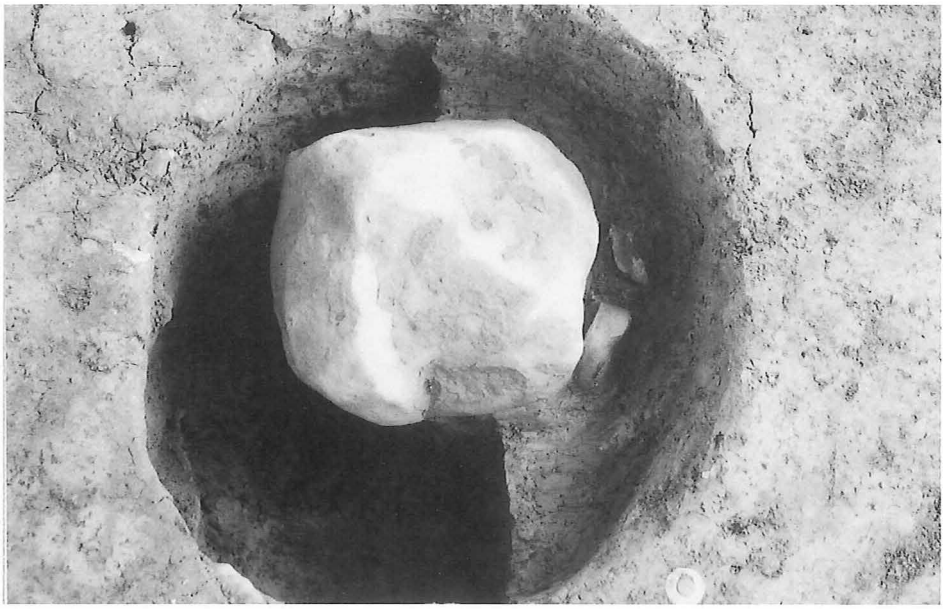
北半部完掘状況
（西から）



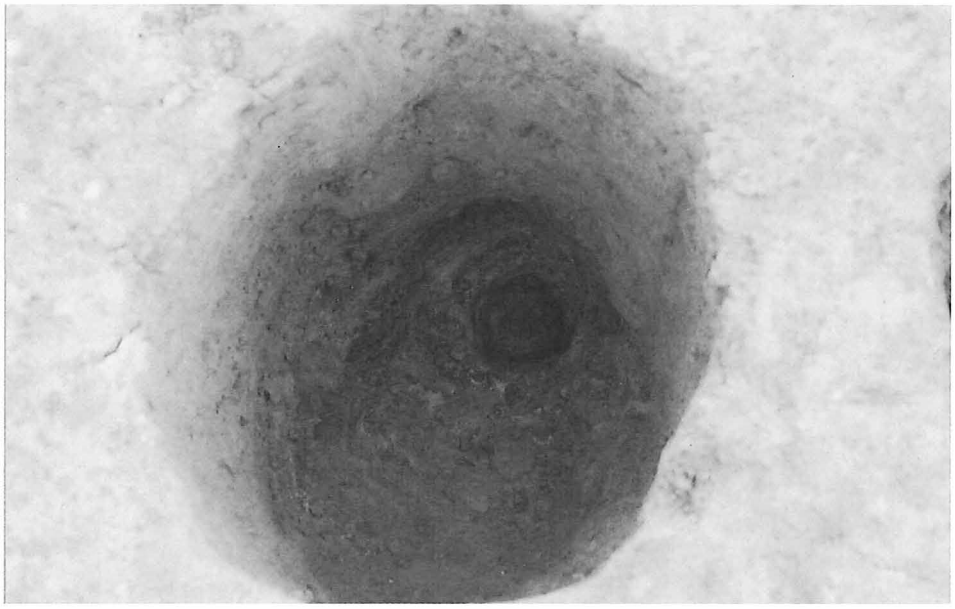
南半部完掘状況
（西から）

Pit65-66
検出状況
（南から）

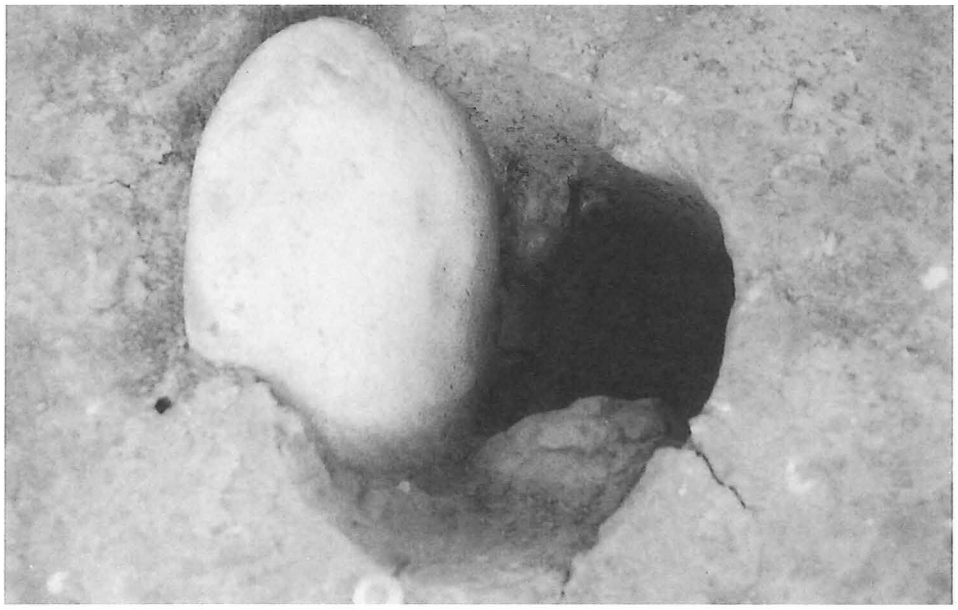
図版 2



Pit39
遺物出土状況

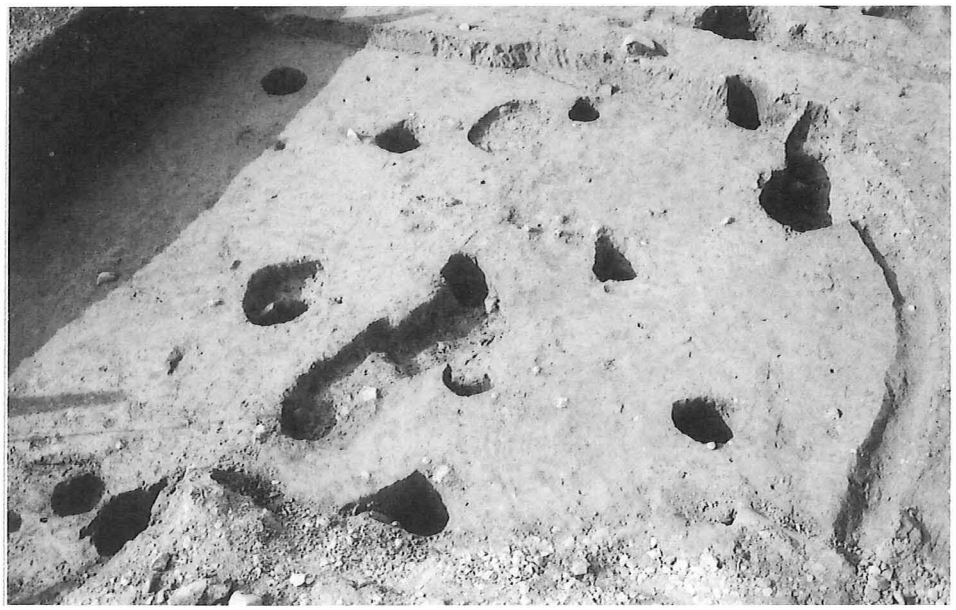


Pit45
木柱出土状況

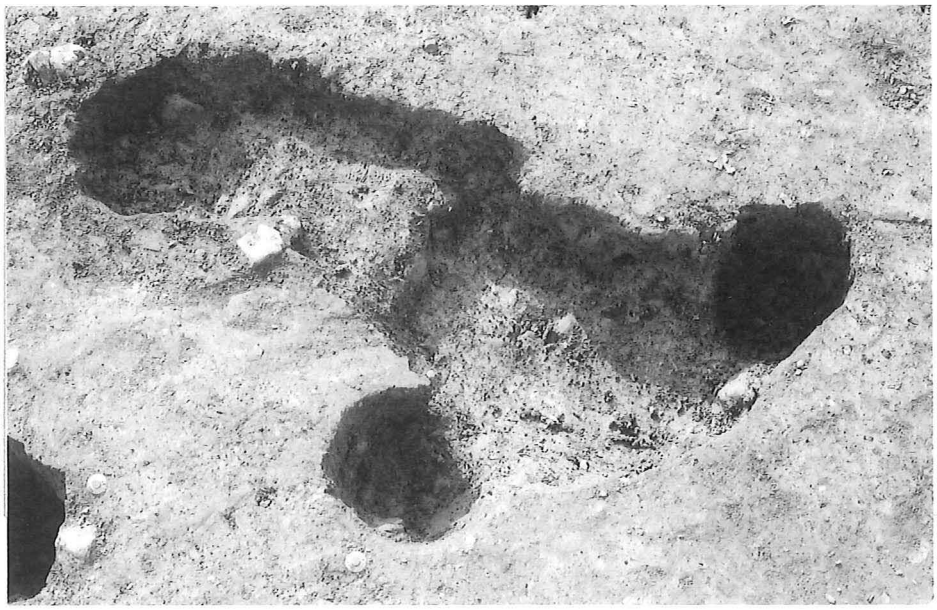


Pit77
遺物出土状況

SH1
遺物出土状況
（北から）

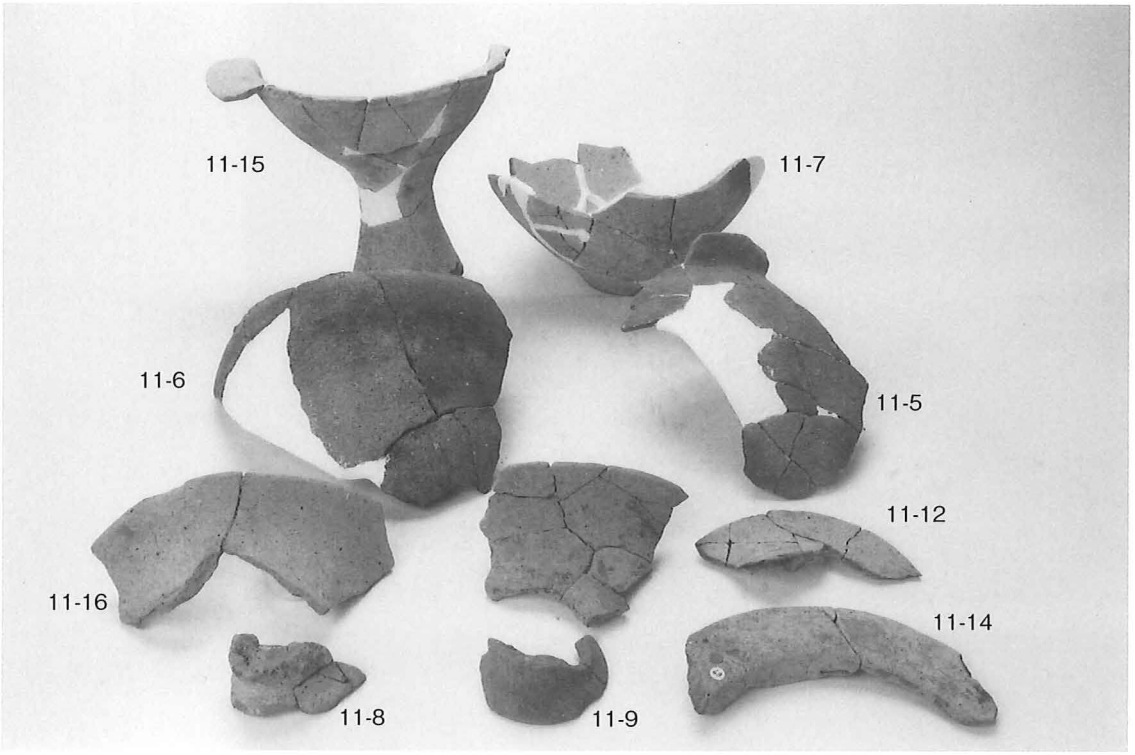


SH1完掘状況
（南から）

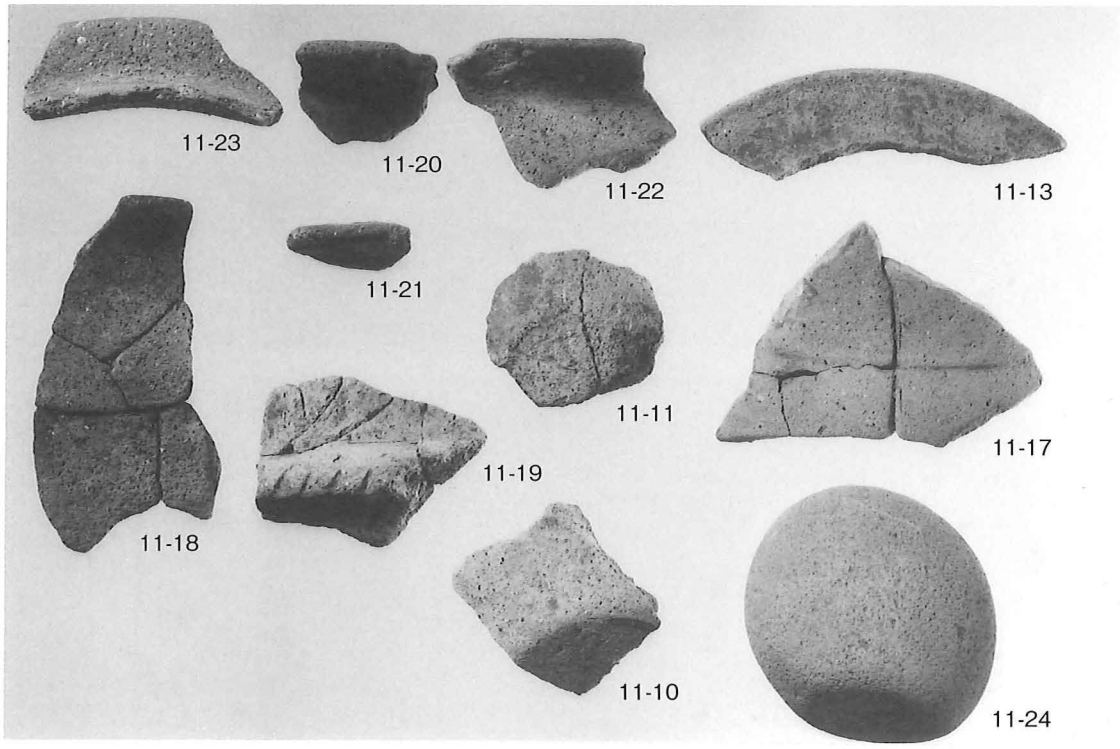


SH1炉跡
完掘状況
（東から）

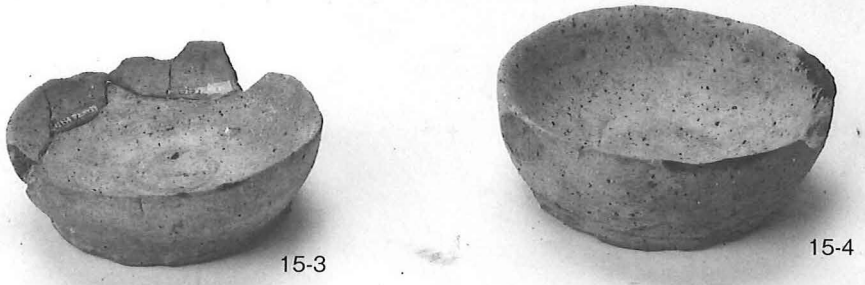
図版 4



SH1 出土遺物①



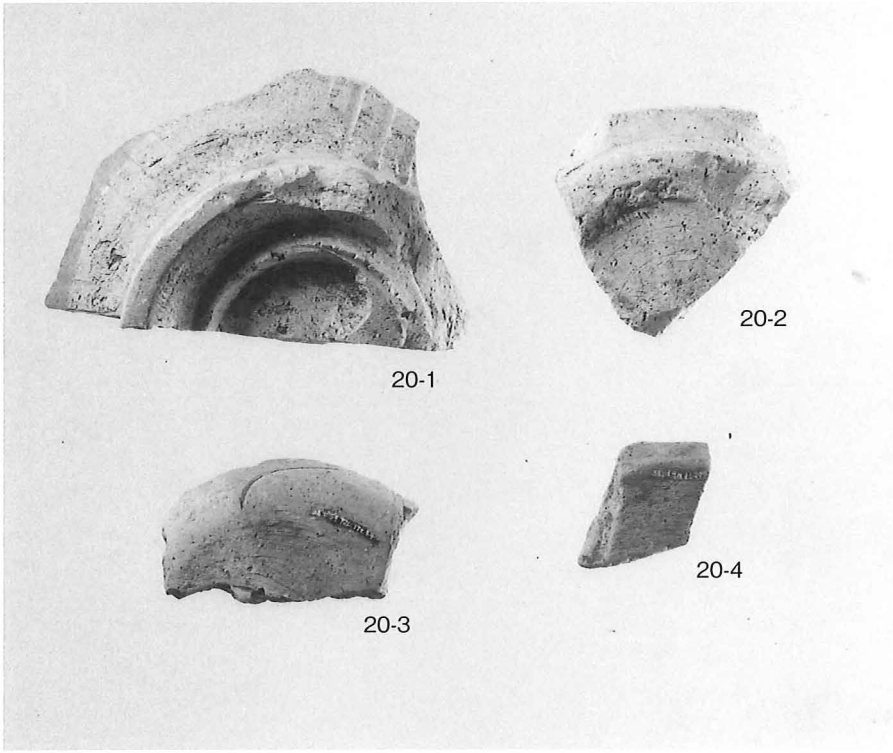
SH1 出土遺物②



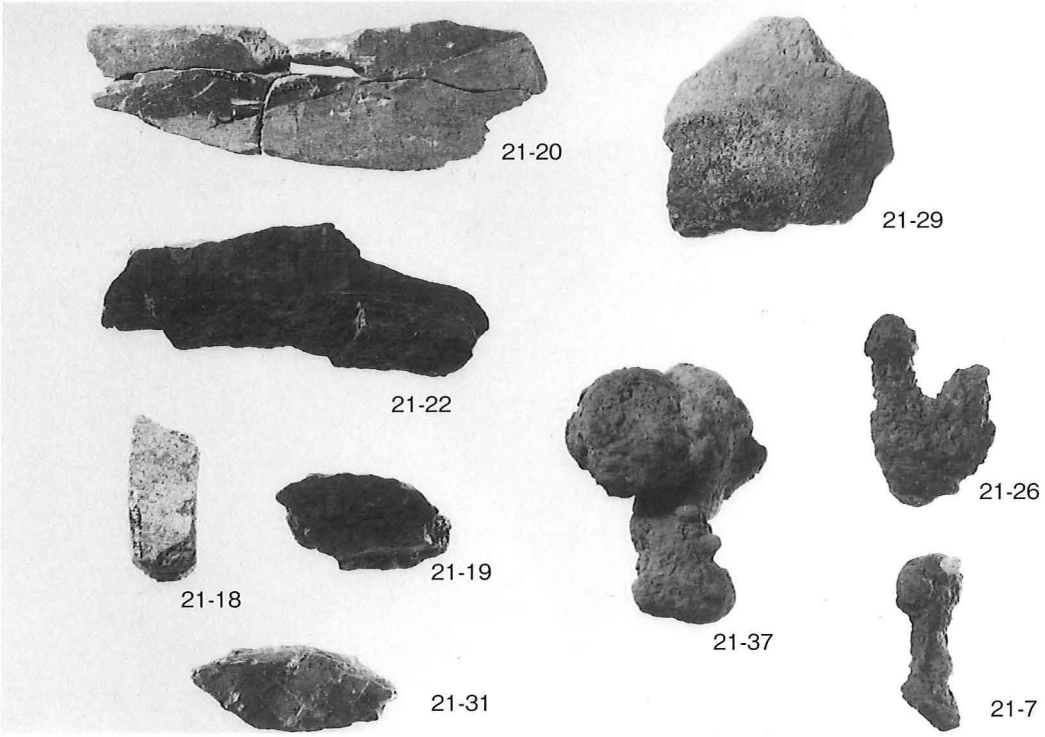
SB1 出土遺物①

SB1 出土遺物②

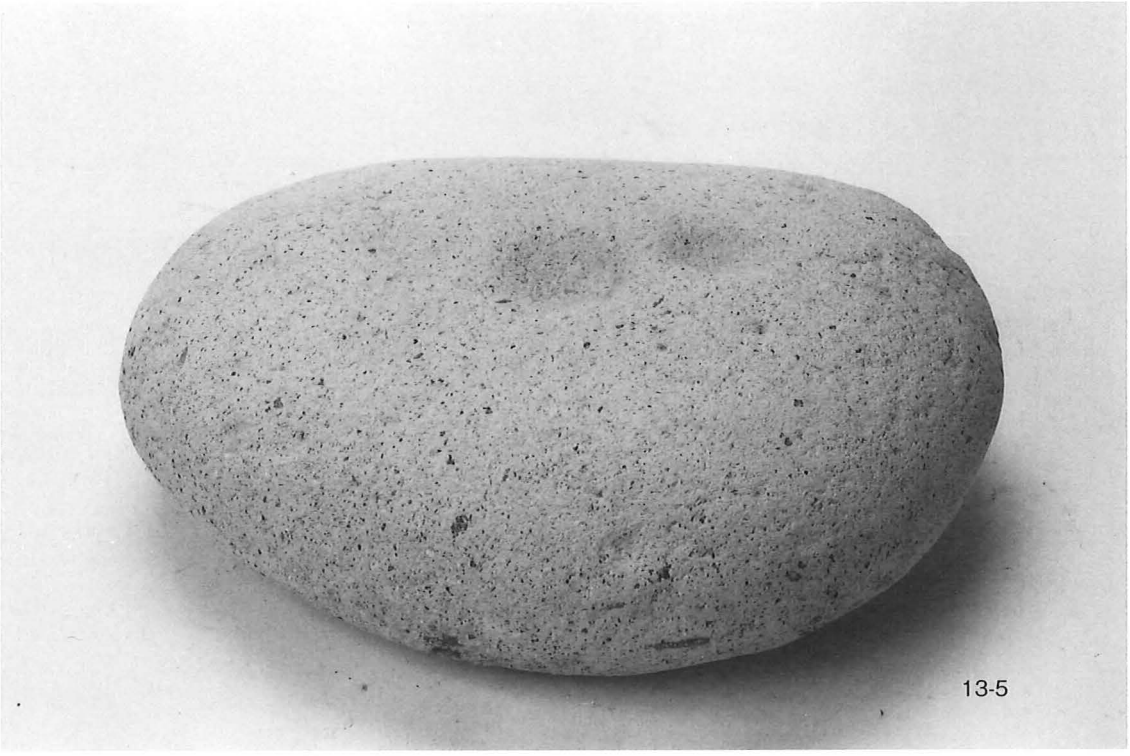
図版 6



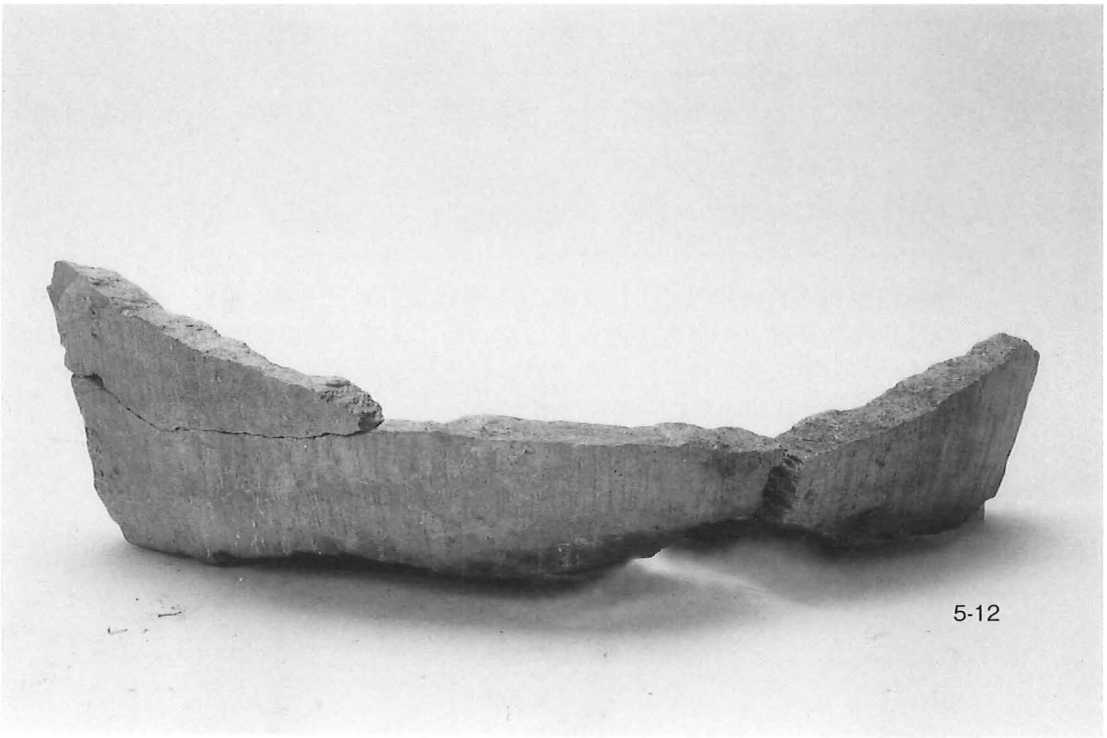
柵列出土遺物



石製品・鉄製品



Pit77 出土台石



TP3 Pit4(Pit110)出土石鍋

報告書抄録

ふりがな	ひらきいせき
書名	開遺跡Ⅱ
副書名	主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第193集
編著者名	中尾篤志
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570　長崎市江戸町2-13　TEL　095-894-3383
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
開遺跡（ひらき）	諫早市（いさはやし） 飯盛町開名（いいもりちょうひらきな）	342	90-14	32° 46′ 49″	130° 1′ 24″	060710 ～ 060823	180㎡	県道改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
開遺跡	遺物包含地	弥生・中世	掘立柱建物・ 竪穴住居	弥生土器・ 陶磁器	

要約	標高17m前後の河岸段丘上に立地。150基以上のピット群を検出し，中世の柵列・掘立柱建物群などの存在が明らかとなった。また，弥生時代中期末～後期初頭にかけての竪穴住居跡と，これに伴う掘立柱建物が見つかり，遺跡内での弥生時代集落の存在がはじめて明らかとなった。

長崎県文化財調査報告書　第193集

開遺跡Ⅱ

平成19年3月30日

編集　長崎県教育委員会
長崎市江戸町2-13

印刷　株式会社インテックス
長崎市幸町6番3号